
いちばんうしろの
大魔王
ACT13
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばんうしろの
大魔王
ACT13










いちばんうしろの
大魔王
ACT13

# いちばんうしろの大魔王
# ACT 13

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次

ようやく書き出す気になった。

もちろん、この物語のことである。とはいえ、最初に〝物語〟について語らなければならない。カッコつきの物語――つまり、一般で言うストーリー――のことだ。

俺たちは、〝物語〟を読む。映画でも連続ドラマでも漫画でも小説でもいい。それは、当然ながら楽しむために読むのだが、〝楽しい〟という感覚は、「この先はどうなるんだろう」という期待に裏打ちされている……場合が多い。

つまり、なんらかの終幕が前提とされている、ということだ。

もちろん「もうすぐ終わるのだけれど、終わって欲しくない」と感じられる物語だってあるだろうが、それとて〝物語〟には〝終わり〟があるということが前提になっていることだけは確実だ。

冷めた見方をするならば、登場人物が、死ぬか、救われるかが〝物語〟というわけだ。

だから、人々が――俺だってそうなのだが――感動する〝物語〟は、〝終わり〟からはじまる。悲劇でも喜劇でもいい。複雑な因果関係がひとつの結末へと収束していき、それが様々な偶然と人間の業がもたらす力により、ある究極の一点で弾ける！　その一点のために〝物語〟はあるのだ。つまり、それが死神の鎌であろうと、赤い糸の結びつきであろうと、〝運命〟は〝終わり〟のためにある。

そして、〝物語〟が虚構であること、それでいて我々がいかに実生活を〝物語〟に支配されているかは、本作をここまでお読みの方ならばご存じの通りである。

つまり……そう、俺たちは物事を〝終わり〟から考えてしまうのだ。

男女が出会う――結ばれるか、別れるか。
罪を犯す――逃げ切れるか、捕まるか。
生きる――幸福になるか、破滅するか。
俺たちの意志は、どこまでも〝物語〟というウィルスに侵され続けている。そこには自由意志などないのだ。

　人は時間を感覚として認識できない。人は時間を〝物語〟として認識するのだ。

　二〇〇〇年代に入ったばかりの頃か。神奈川県大和市のとあるマンションの前で、旧い友人からの電話を受けた。遊びの誘いかと思いきや、半年ほど前に別れた俺の元彼女が死んだという報せだった。別れて以来、一度も連絡をとっていなかったが、友人は俺以外からの伝手で動向を聞いていたらしい。

「え？　ホントに？」

《ホントだよ。詳しいことがわかったらまた連絡してやるよ》

「あちゃー、マジかー」

《うん。まぁ、そんな感じなんだけどさ……》

「いや。そうか。伝えてくれてありがとう」

　そんな何の意味もない会話をした覚えがある。

　その時は、混乱も気落ちもしなかった。そんなものだ。

しかし、翌日になって同じ友人から電話で死因を聞いたとき、どういうわけか何かに追い立てられているような気がした。いてもたってもいられず、どこからかわいてきた焦りだけが頬に冷や汗を流させる。ようやく死を実感したとか、そんなことではない。最初から実感などなかった。そもそもがもう会えない相手だ。それが永遠になったところで、いかほどの変化があるだろう。

彼女の死因は、本当に間抜けなものだった。頭痛がひどく、いつも飲んでいる薬をやや多めに飲んだのだそうだ。睡眠薬自殺ではなかった。薬には慣れていたし、もっと多く飲んでなんでもなかったこともある。直接の死因は、いわゆるエコノミークラス症候群というやつだった。つまり動脈の血栓だ。水も飲まずに長時間同じ姿勢で寝ていたことが死を招いたのだ。

頭をよぎったのが「俺と別れていなければ」という言葉だった。自慢じゃないが、他人の世話にはそれなりに気が回る方である。薬も管理していただろうし、日頃から軽い運動程度はさせていただろう。が、それこそが俺が彼女から振られた理由だった。俺のそういうところがうっとうしかったのだそうだ。

――もしかしたら、彼女は生きていたかもしれない――

ふと、そう思った。

俺が彼女の世話をできていれば。いや、もちろんそんな未来は有り得ない。有り得ないのだが、それでも……。

焦燥感の根本は、そこにあった。

彼女は自死に近い死を選んだ。いや、死に向かいやすい性向を持っていたということになる。自らの体調に鈍感でありながら、自らの精神を脅かすものに敏感であり、行動よりも静観を選び、厚意を攻撃と捉えるような性格。それは長期的に言えばあらゆる局面で死を選び続けていることになる。

一般的に自死を選ぶ動物は狂っていると言われている。レミングなど集団自殺をすると噂されたこともあったが、それも嘘だったと判明している（あるドキュメンタリー映画のやらせが原因だった）。実際に確認されている生物の自死行動も複数あるのだが、研究が進むにつれ、それのほぼすべては寄生虫なり、他生物の毒物が原因だと判明した。例えば、ハリガネムシはカマキリの体内に寄生し、カマキリを河川に飛び込ませる。ハリガネムシは水中でしか交配できないので、宿主を殺して水中に飛び出るのだ。また、ある種の蜂は、卵を産み付けたゴキブリの脳を操ることができる。注入した毒物によりゴキブリの意志をうばい、幼虫が孵化して体内を食らっても痛みを感じぬ状態にしてしまうのだ。おまけに歩行が可能な状態のうちは、ハチにより巣穴まで誘導されることにより、自らの足で墓穴まで向かっていくのだという。

人間とて、生物だ。ならば、何があっても生きようとするのではないのか？　それならば人の自殺とて有り得ないのではないか？

そう。人間は自らの意志で死ぬことはない。

ならば、我々が知っている自殺とは、何なのか？

答えはひとつだ。

誰かが人間の脳を操っている。

もう一度言おう。

俺たちの精神は、何者かが注入した〝物語〟というウィルスに侵されている。

そのため、人間は自殺する。無謀な行いをして死ぬことがある。

一方、物語は寄生虫の常とでも言うべきか、人間に恩恵をもたらすこともある。

人は時間を感覚として認識できない。人は時間を〝物語〟として認識するのだ。知性は時間を認識できなければ生まれなかっただろう。物語こそ知性であるのだ。

ならば、〝物語〟を捨てたなら。

違う。捨てなければならない。

捨てなければ、終わる。

〝物語〟は必ず終わる。人類にとってその時が滅びの時だ。物語を植え付けた存在の目的が判明する時だ。

我々の脳内より何かが孵化するのか。

あるいは死後巨大なものに喰われゆくのか。

それならば、今すぐにでも〝物語〟を捨てられるのか？

原初の人類。〝物語〟の発生について考えなければならない。

ならば……それを見に行こう。

# 1　黄泉(よみ)にも我らの生活あり

絢子(じゅんこ)は阿九斗(あくと)から離(はな)れようとせず、それを阿九斗も許していた。目の前には森があり、そこに入って行かなくてはならない。それだけでも不安であるのに、ここは死後の世界である。正確には、自らの立っている場所が何なのかわかっていないが、そう呼ぶ以外にはないだろう。ともあれ、五里霧中(ごりむちゅう)であることには違いはない。

前方に森。後方に海。森も海もどこまでも続いているように見える。

立っている場所は砂浜(すなはま)。

渚(なぎさ)こそ終末の風景である、と阿九斗は思う。

「仮想異空間とは違う……いや、同一なのかな？　しかし、このイメージは……」

「ああ。死後の世界ってイメージには……不思議と合っているんじゃないかな」

絢子は森をのぞき込んだ。

「ダンテの『神曲』……は森の中からはじまるんだったよな？」

「わかるよ。でも、僕(ぼく)らにはそういう意味での信仰(しんこう)なんてないからね。キリスト教的なそれっていうのは、借りてきたイメージでしかないよ。でも、死後の世界のイメージを感じるのは不思議ではあるよね」

阿九斗は言い、絢子の手を握(にぎ)って森へと促(うなが)した。
「ともあれ、森にしか行き場はないよ」
砂浜はどこまでも続いているわけではなく、ほぼ垂直に切り立った崖(がけ)に左右を囲まれていた。
「あ、ああ……。でも、気になるだろ、それに森には道がないんだし……」
絢子は阿九斗に続いて木々の間に、おそるおそる足を踏(ふ)み込む。
「いや、道なら僕が切り拓(ひら)いて……」
阿九斗は言ったが、あにはからんや、重なり合った木々を二、三本も避(さ)けて通ると、そこに森の小道が現れた。
「助かる……な。道があるなんて」
引きつった笑(え)みを浮(う)かべて、絢子が言った。
「しかし、人がここに来たことがあるってことでもあるけど」
阿九斗は小道に足を踏み入(い)れ、その先を見た。草が抜(ぬ)かれ、踏み固(かた)められた土の道がうねりながら続いている。まだ、その先は見えない。



「誰かいるってことか？　か、勘弁（かんべん）してくれ……まったく……」
　絢子は心配げに首を巡（めぐ）らせた。
「心配することはないよ」
　阿九斗は先に立った。
「心配になるに決まってるだろ。ここにいるとしたら死人なわけで……」
　そう言いながら、絢子は仕方なく後を追う。
「僕らだって死人だ」
「いや、そういう感覚はあんまり……」
「人類がほとんど死んだはずだよ。だから、こっちにみんな来ていると考えれば、脅威（きょうい）も今までと同程度なはずさ」
「なんというか、本当に割り切りが早いな君は……」
　最初はおそるおそるだった絢子も、しばらく道を行くと、足取りだけは軽くなり始めた。それでも、しがみついた阿九斗の腕（うで）を放すことはなかったので、阿九斗も歩調を合わせる。
「やっぱり、ここでも変わらないな」
　阿九斗は言った。
「な、何が？　こっちの世界は生きていた時とずいぶん違う気が……」

「いや、森に入っているのに、視界が良好ってことだよ。気づいていなかったかい？　ここには、明かりがあるんだ」

周囲を見回し、阿九斗の言葉の正しさに絢子も気づく。

「ああ。そういえばそうだ……太陽は見当たらないが、砂浜も見えないということはなかったな」

「上を見れば、葉が茂っているからね。明かりがないのに見えている。そういうことになるんだ」

「死後の世界だって考えれば……不思議はないかもしれない。そうだ、『神曲』なら、ここらあたりで獣が出てくるんじゃなかったか？」

絢子が、怯えた声を出した。

と、まさに折良く、遠くからうなり声が聞こえてきた。

「ひぃぃ！」

絢子はびくりとした。

が、阿九斗は、狼ともライオンともつかないが、かろうじて四足獣のものだろうとわかる。その、いささか類型的にすら感じられるうなりに、首をかしげた。

「動物園でアルバイトをしていたとき、こんな動物のうなりは聞いたことがなかったな」

「そ、そうなのか？　じゃあ、魔獣とか……」

絢子はまだ声を震わせている。

「それも考えにくいかな……ともかく、ここまで生物の気配はなかったわけだしね」

「ああ、そうだった……」
　絢子がうなずいた。と、獣の声が止む。
「ふ……ん」
　阿九斗は何かを理解し、鼻を鳴らした。
「とすると、道を抜けると、街があるってわけだ」
　その阿九斗の言葉に、絢子は目を見開く。
「まさか。そんな、ありえな……」
　言葉は途中で途切れた。道を緩やかに曲がると、視界が一気にひらけた。
　眼下に街があった。阿九斗らが立っているのは、学校の裏山で、そこからいつもの帝都の姿が見渡せる。
「いや……な、なんだって……これは……」
　絢子は混乱しはじめていた。
　帝都は戦争以前の穏やかな雰囲気のままそこにあり、数ヶ月時を遡ったかのようだった。時間は、日差しからすると、正午にはまだ少し間がある程度だろう。一日の時間感覚が異なることにも、目眩のような感覚に一役買っていた。
　阿九斗とて予測していたとはいえ、冷静ではいられなかった。
「やっぱり……。でも、ちょっと驚くね」
「な、何を勝手に納得しているんだよ！」

絢子は阿九斗にくってかかる。驚き以上に、阿九斗がこれを予測していたということが、そもそもわからない。

「確信はないんだけど、これは僕らの願望を反映しているんじゃないかと思うんだ」

阿九斗は答えた。

「願望？　まだ少し意味がわからないけれど……」

「いや、ここでの現象が君のイメージにいちいち関連しているように思えたんだ」

「確かに、私の怖（こわ）がっていたことがそのまま起きたように思えたな……」

絢子が納得したようにうなずく。

「うん。それなら明かりがないのに見えていることも、森での獣の声も説明がつく」

「そうかもしれないが……」

絢子は、目を閉じ、精神を集中させた。が、数秒で目を開ける。

「本当にそうなのか？」

「この世界……　死後の世界が思考を反映して変化していると考えるなら、強い思考しか有効じゃ無いだろうね」

「魔術（まじゅつ）の基礎（きそ）でそれはできているはずなのだが」

絢子は手の中にマナ球を作り出し、それを回転させてみせる。

「それは馴染(なじ)んでいる行為(こうい)だからかもしれないし、ここでは世界の成り立ちを考えるに、僕の思考が一番強いからかもしれない」
「……海辺でのあれは、私の潜在(せんざい)意識がそうさせた……ということなのかな。恐怖(きょうふ)や不安を制御(せいぎょ)できてはいなかったしな」
「かもしれない。だとしたら、ここの世界の可能性も限界も少しは見えてくると思うのだけれど……」
　阿九斗がそう口に出したとき、割り込んできた声があった。
「おーい」
　やや間の抜けたその声の方向を見やると、木多淑恵(きたよしえ)が小道をやってくるところだった。
「木多さん？」
「淑恵？」
　二人は驚きの声をあげ、淑恵の顔をじっと見つめる。
　歩み寄ってきた彼女は確かに淑恵だった。
「その表情は疑っているね」
「もちろんだ。だって……」
　言いかけた絢子を遮(さえぎ)って淑恵は話しはじめた。
「いや、わかるよ。無理もない。私もこちらに来たばかりだから、何とも断言はできないが。ここでの現象はつまり、いや、事象と言い換(いか)えるべきかもしれないが……」

いつもの持って回った口調だった。今度は苦笑いを浮かべた阿九斗が話を遮った。

「つまり、死者となった皆（みな）の願いがそのまま叶（かな）う場所だ、と」

淑恵は、にやり、としてうなずく。

「よくわかってらっしゃる。さすが阿九斗君というところかね」

絢子はその二人の様子を見て、戸惑（とまど）ったように首を振る。

「その話なら私も聞いた。だが、それなら、木多さんが存在しているのも妙（みょう）なことにならないか？　だって、それなら、あなたが私か彼（かれ）の願いで存在しているだけだということもあり得るわけで……」

深刻な顔で絢子は言った。

確かに、淑恵がそういう存在だったのならば、淑恵は本物であるとは断言できないことになる。

しかし、淑恵はさらりと言った。

「もちろんそうだともさ。でも、そうだったとして何が問題なんだろうね？」

「えっ！　問題なんかない……っていいたいのか？」

絢子は淑恵の言葉に驚いて混ぜっ返す。

「私には、ここにやってきてから、君たちがいない間の記憶（きおく）もあるんだ。もちろん、その記憶自体が今生まれたという考えもあるが……ともかく、その記憶によれば、深く考えさえしなければ、その場の生活はうまくいってしまうことは保証してもいい」

自信ありげに淑恵は言った。

「大丈夫(だいじょうぶ)……なのか？」
　まだ不安そうな絢子だったが、淑恵は請(う)け合(あ)う。
「他人の伝言も伝わるし、意見の相違(そうい)もある。どうやら、個々の人格というやつは感じられる。もちろん、私もこういう性格だ。疑い、調べはした。だが、他者性の存在証明などやはり不可能だからね。そこは考えないことにした」
　淑恵は街の方向を指し示した。
「ほら、街は機能している。私たちの見ていない間にも。生活だけはね、元通りなんだ」
　その言葉に、阿九斗は引っかかる物を感じて片眉をあげる。
「生活だけは？」
　すると、淑恵は言いにくそうに肩(かた)をすくめた。
「もちろん、いろいろと変わったことはある。それは生徒会長から説明してもらうのがいいかな。私じゃややこしい言い方になってしまう」
　そう言って淑恵は先頭に立った。学園に行く、というのだ。
「学園に行くのか」
　絢子が懐(なつ)かしそうに言った。
「そうだとも。なんだかんだ生活はしやすい」

学園は授業中らしく、外には生徒たちはいなかった。だが、窓を見ると、各教室は生徒たちで埋(う)まっている。

「なんとも、昔のままだ」

阿九斗は言った。

「君にとっては不思議なことも待っているんだけれどね」

淑恵は、含(ふく)みのある言い方をしながら、生徒手帳で生徒会長を呼び出した。そして、阿九斗たちを生徒会室に連れて行く。

もちろん校舎の構造も変化しておらず、案内されるまでもなかったし、授業中でありながら呼び出されたらしいリリィも、このことを予測していたのか、表情を動かさずに皮肉めいた口調で「ここのことが気になるんだろうがね」と言うと、〝神々〟が提示するデータをデスク上のマナスクリーンに表示して見せたのだった。

「挨拶(あいさつ)もしないで、と思うかもしれないが、どうにも時間が経過した感じがしなくてね。ボクにとっては珍客(ちんきゃく)というわけでもないのさ」

リリィは阿九斗たちに席を勧(すす)めた。

「僕にとっては感動の再会なんですが」

阿九斗が真面目(まじめ)に言うと、リリィは意地悪な笑みを見せた。

「よせよ、世界の破壊者(はかいしゃ)が」

そして、改めてマナスクリーンのデータを見るように促した。
それは、現在の帝国(ていこく)における住民の統計データだった。
「僕が魔王(まおう)と判定される以前の世界ですね」
阿九斗はリストにざっと目を通しただけでそう見抜(みぬ)いた。
「優秀(ゆうしゅう)すぎて嫌(いや)になるな、キミはさ」
リリィはぼやいた。
「だが、助かるね。ボクは統計データをすべて記憶していたりはしないからね。過去にさかのぼれるだけさかのぼろう」
リリィは統計の年号をさかのぼらせる。阿九斗は、それを見てうなずいた。
「うん。僕が記憶しているデータと同じだ。時間を現在のものに戻(もど)してください。あと数分で出生届が出るはずなんです。それが正しければ、僕らは歴史をやり直していることになる」
「つまり、この……死後の世界って、私たちが死んだ二年ほど以前の世界が再現されているってことでいいのか？」
絢子が言った。
リリィが首を横に振った。
「似たようなものではあるけど、違うかな。気づいているだろうけれど、ここには人造人間がいない」
「そうなんですか？」

絢子は驚きの声をあげた。

「ああ。三役ではアルヌールだけがいない。もちろん、ころねも、他の労働用人造人間も。生活の維持は人間が働いて行っている。そして……」

リリィの言葉を阿九斗が遮る。

「けーな」

「ああ。けーな。彼女だけは、いなかったことになっている」

「その二点だけが、変化なんですか？」

絢子がリリィに聞いた。

「皇帝は加寿子。そして、黒魔術師たちの弾圧も起こった記録がない。観念的な言い方をしないで事実だけ言うとこうなる」

「すると？」

「平和なんだよ。ボクには退屈なくらいにね。黒魔術師の反乱はない。ゼロによる神々と人造人間の一括管理システムはない。共和国存在の記録はなく、海外も帝国への抵抗気配はない」

リリィは腕を組んで、机に肘をついた。

「阿九斗クンを珍しいと思えない理由もそこにある。君は魔王じゃない」

「本当に？」

阿九斗は聞き返した。



　リリィはうなずく。

「嬉(うれ)しいかい？　疑うかもしれないが、魔王は死んだ、とさ。復活もしていない。噂もない。拍子(ひょうし)抜(ぬ)けしたくらいさ」

　阿九斗は、それをどう受け止めたものかわからない、といった表情になる。

「わ、悪いことではないよ。うん、その通り。良かった、良かった……」

　絢子は狼狽(ろうばい)したようにつぶやく。が、そう言った自分で納得できない表情をして、阿九斗の顔色をうかがった。

「時間軸が違うのか？　それとも、純粋(じゅんすい)に誰かが望んだ世界なのか……。そもそも、僕らは過去の記憶を持っている。他の人は持っていないってことなんですか？」

　阿九斗がいぶかしむ。

「時間の話をすると面倒(めんどう)なんだけれども……」

　淑恵が言いかけたのを、リリィが制した。

「ややこしくなるからやめてくれ。記憶を持っているのは、キミと関係して真相を知っている者だけだ」

「そうだ。時間のことで話を止められたけれど、簡潔に言っておかなくちゃいけないことがある。時間を越(こ)えると言えば、その方法は大和望一郎(やまとぼういちろう)だけが知っていた未来の技術だった。覚えているだろう？」

　淑恵が聞いた。

「覚えている。だけど、僕が使った装置は……」

「その系譜とは別の技術だ。だからこそ、自然なことなのかもしれないが、ここにはブレイブが……ヒロシがいない。時間旅行装置を受け継いでいるはずの彼が」

　リリィは再び統計データをスクリーンに映して見せる。

「ここに三輪ヒロシの名はある。つまり彼はここにいる。だが、まだ姿を見せていないんだ」

「けーなは最初からいなかったことになっているのに……ヒロシはいるのか。それなら、いったいどこへ……」

　阿九斗は誰に聞くでもなくつぶやいた。

○

　当のヒロシは、街外れの森の中にいた。

　そして、忘れもしないあの男と向かい合っていた。

「大和望一郎……」

　死後、ここにやってきたという経緯は絢子らと同じである。だが、ヒロシだけは別の道を通っていた。導かれるように森の奥に入り、木の切り株に座っていた望一郎の前に、いつの間にか立っていたというわけだ。それは、運命だったのか、ヒロシがそう望んだからなのかは、ヒロシ当人にもわからなかった。

　それでも、これこそ自分のやるべき事の端緒なのだと彼は感じていた。望一郎にはいくつも質問しなければならないことがある。彼が死んでしまったせいで宙に浮いてしまった問いは枚挙にいとまが無い。

「あんたのチームの人間に会ったよ」

　ヒロシは皮肉っぽく言った。

「その調子じゃ、ずいぶんひどい目にあったんだろうね。なにぶん、気性の荒い連中だから」

　望一郎は、ヒロシが古くからの友人であるように応対し、くすくすと笑った。その印象は以前よりも柔らかく、美貌と相まって、会話する者を魅了せずにはいられない雰囲気に満ちていた。

　文句を言うつもりだったヒロシとしても勢いは弱まる。

「何度も殺されそうになった。あんたの遺言？」

「まさか。気づいてはいたが、私の徳が足りなかったのさ。口先だけで詫びることしかできないが」

「そんな詫びならいらない。彼らも、死んでここに来ているのか？　それなら文句のひとつもあるけれど」

「どうだろう？　しかし、私にあわせる顔はないと見えるね」

　望一郎は微笑んだ。

「誰にあわせる顔もないよ。あんたの野望……いや、あんたのは野望じゃないのかもしれないけれど、ともかく、あんたの意志を誤解だか、わざと曲解したのか、妙なことをした連中が、こっちへの大量移民を生み出しちまったというわけさ」

　ヒロシは曖昧な言い方をしたが、望一郎にはそれで通じた。

「ああ。そうなるかもしれないとは思っていた。そして、私は、そうなってもかまわないかもしれない、などとあきらめていた」

「悟(さと)ったみたいなことを言わないでくれよ」
「そうだな。死んでしまった人々のことを悪く言いたいわけでもない。だが、破滅を防ごうとはしたんだ」
その望一郎の口調に、ヒロシの中で不快感が高まる。
「つまり何が言いたいんだ？」
語気荒く聞いた。
「時系列に沿って説明しよう。私が歴史を変えようとしたのは知っているね？」
望一郎は自嘲(じちょうてき)的な笑みを浮かべた。
「ああ、知ってる」
「それは、世界最後の大魔王が覚醒(かくせい)し……外宇宙からの神々がやってきてこの世界を滅ぼしてしまうという最後を見たからだ」
「それも知ってる。それを回避(かいひ)するためには、魔王と自同律の契(ちぎ)りが必要……って言ってたんだっけ？　よくはわからない言葉だけれど」
「そう。そして、それは成(な)し遂(と)げられなかった」
望一郎の言葉に、ヒロシは過去を思い出しながらうなずいた。
「そこまではわかる。ゼロたち機械の神々は自同律に救われようとして、人類を自分たちと同様にデータ化して異次元に飛ばそうとした。人類が滅んでも問題ないように。それに猶予(ゆうよ)を与(あた)えようとしたのがアニキ……現在の魔王だ」

「そうだ。その結果、私の知っている未来とは違う未来となった」
「それが間違いだって言いたいのか？」
　ヒロシが聞くと、望一郎は肩をすくめた。
「本質的に間違いかどうかは難しいな。実際、ここは死後の世界で、ここは猶予、魔王が与えた人類に対する猶予そのもののような世界だからね。まだ終わってはいないんだ」
「まだ終わっていない？」
　ヒロシは小首をかしげた。
「だが、ここ、が終わりかもしれない。終わりが無いという終わりがあるのかもしれない。ここで永遠の時間が流れるという終わりが」
　望一郎の言葉に、ヒロシはため息をついた。
「わけのわからない言い方をするもんじゃないって……」
「すまない。昔からこうだった。どうにもならない部分だ。私の知っている未来とは違う未来だが、結末は予測通りだったとも言えるんだ。君の知っている歴史において何が起こったかは知っている。私は外宇宙の神々と契約を結ぶべく、彼らの精神体であるザ・ワンと交渉を持った。彼も宇宙間で侵略を行わずに済む世界を望んでいたと思っていた」
　ヒロシは意味を受け取ろうと努めた。要素を分解して考えれば、わからない内容ではなかった。
「しかし、ザ・ワンは裏切ったというわけだ」

「そうだ。静かだった共和国も帝国に戦いを挑(いど)んできた。バラバラな出来事であるように見えるが、外宇宙からの侵略が背後にあると見れば、ほとんどのことは予測され、関連づけられていたんだ。初期魔術文明が残した機材も、黒魔術師たちの計画も、無貌の力も、外宇宙からの侵略とそれに備えるためのものだった。侵略が成功したということは、最終的には未来を変えられなかったことを意味する」

「その言い方なら、まぁなんとか理解できる。でも、ここが〝猶予〟の場所なら、まだ大丈夫なんじゃないのか？」

ヒロシは言った。

「まだ大丈夫？　それは、どういう意味だ？」

今度は望一郎が聞き返す番だった。

「過去を変えるチャンスはまだあるんだろ？　簡単なことだと思う。魔術文明を無くすとか、内部抗争(こうそう)自体をやめて、外宇宙の神に勝つ戦争の計画を進めさせるとか」

ヒロシは自信ありげに言い、腕に巻いたブレスレット状になっているブレイブ・スーツを指さした。

「これで時間を越えられるんだろ？　死んでからも可能なのか？」

「気が早いな。つまり君は人類を救いたいのか？」

望一郎は驚いたように目を見開いた。

「わからないけれど、運命みたいなものを感じてるんだ。少なくとも魔王には救えないんじゃないの？人類ってさ」

ヒロシはにやりとした。

「それが君の意志ならいいさ。だが、未来を変えるのは難しい」

望一郎が首を振った。

「どうだか。あんた、自分が死んで未来は変わったって言ったぜ。だから、変化自体は難しくないんだろ？」

「いいや、変わらなかったんだ。最後には、ここ、に来る」

望一郎は、皮肉めいた表情で自らの足下(あしもと)を指さした。

「ここ？」

「死後の世界、さ」

「わかりにくいな。世界がいくつもあって、さ。現世、仮想異空間、外宇宙、異次元、死後の世界……って分類になるのか？」

ヒロシは顔をしかめた。

望一郎が訂正(ていせい)する。

「少し違う。異次元と外宇宙は言葉の違いで同じものだ。異次元についてはよくわかっていない。おそらくは無数にあるのだろう……としか。だが、他(ほか)は正しい分類だ。それらにはすべて自同律が関(かか)わっている。おそらくは、自同律が作ったと言ってもいい。そのため、理解については比較的(ひかくてき)容易だ」

「けーなちゃんが作った？　だから、理解は可能って？」

「私にとっては、須藤理夢、だけどね。理解が可能というのは、この世界のあらましを簡単に説明できるということさ。私たちの宇宙は自同律が作ったという理解でいい」

「そんなに簡単に言い切っていいのか？　そもそも時間を越えて歴史を変える話をしているんじゃなかったのか？」

　ヒロシはいぶかしんだ。そもそもこの会話自体に何を求めているのかわからなくなってきていた。

　その様子を見て、望一郎はくすりと笑う。

「時間を越えるなら、君には理解していて欲しいんだ。私たちの知識と、私たちの世界が矛盾していることに」

「また話が逸れていないか？」

「逸れてはいないさ。私たちの知識において、時間とはなんだ？」

　抽象的な質問だったが、ヒロシには、どうやらその質問が核心に迫るための一歩だと気づいた。この世界をやり直し、終末を避けるためには、時間について理解しておけということなのだろう。

　そして時間については、学生であったヒロシは物理の時間にある程度は習っている。だから、教科書的に答えた。

「時間は相対的なもので、物体が移動する空間とイコールと言ってもいい。速度が上がれば移動可能な空間が広がり、様々な事象に出会える可能性が増加するが、物体は一方にしか進めない。二次元で表現すれば、水に広がる波紋の円周上の一点のどこかしか選べないようなもの」

「そんなところだ。同一の物体が複数の場所に同時に存在することはできない。だが、ここではその原則が崩れる。だからこそ私は時間をさかのぼれた」

望一郎は木の枝を拾い、それで地面に一本の線を引いた。

「物体が複数の場所に同時に存在することができないのは、実のところ時間には最小単位が存在するからだ。時間、すなわち空間が無限分割可能なのであれば、アキレスと亀のパラドックスが成立してしまう」

地面に引いた線の中央に印を刻む。その二分割された線分の右側の中央にさらに印を。そうして三十二分割したあたりで、印そのものの太さが線分の横幅を越えてしまう。

「この印自体が物質の最小単位だとすれば、こういうことなんだ」

「そこは理解できるよ。でも、それと時間をさかのぼるのが可能ということはどうつながっている？　というか、この理解だと時間は越えられないということになる」

「その通り。水の波紋のモデルでは、円周上の他の点は、可能性でしかない。つまり、起こるかもしれなかったが、起こりえなかったことだ。物質ひとつが以前の地点に戻れたとしても、他の物質はすでにそこにない。だが、私たちにとって馴染み深かった世界は、水の波紋モデルのようにはできていないんだ」

地面の線を足で消し、望一郎はもう一度、別の線を引いた。

「この世界は、理論物理の法則ではあり得ない世界として構成されている。いわばこの世界は記録された一本のテープ、あるいは文章のようなものだ。線状性があるという言い方になる」

望一郎は、線の上に四角を複数描き、四角の数を線分が右に行くに従って段々と増加させていく。

「そこでは、すべての物質が同時に存在し、過去は過去として残り続ける。積み重ねたブロックに、さらにブロックが追加されていくイメージだ。それならば、ブロックの組み替えは可能だ」

「それだからこそ、過去の書き換え……それに未来の変更も可能なはず、ということなんだな」

ヒロシはうなずいた。

「そうだ。改変は可能だ」

望一郎も答えた。

「じゃあ、スーツの使いかたを教えてくれ」

ヒロシは自らの腕に輝くブレイブ・スーツを示した。

「もちろんその方法は教える。だが、最初から言っている通り、私は、それを無駄だと忠告もする」

望一郎は困ったように眉を寄せた。

「ずっとそう言っているな。歴史改変は可能なのに無駄だって？」

「最初にも言ったさ。どういうわけか、君は最後にはここに来るんだ」

地面を指さした。

「つまり……死後の世界か」

ヒロシは顔をしかめた。一方、望一郎は表情を変えなかった。

「そう。しかも、この場所、この瞬間にね。君は何度でもここにくるだろう」

## 2　永遠の幸福

「はーい、それじゃあ、授業はじめますよー」
　間延びした鳥井美津子（とりいみつこ）先生の声がした。
「隕石（いんせき）が落ちてきたってことだったけど、良かったわねー、何もなくて」
　美津子先生は、ははは、と笑い、生徒達（たち）もこのときばかりは大きい声で笑った。
「いやー、魔王が大変なものを呼んだらしいね」
「ブレイブは隕石の被害（ひがい）を減らして死んだんだって？」
　様々な声が教室に満ちる。
「でも、隕石が落ちてきたのが見えたときは死んだかと思ったわよねー。いつ復興したのかわからないけど」
　美津子先生はいい加減に言った。
　どうやら、阿九斗（あくと）の転校後数日経過した、という形になっているらしい。
　途中から登校した形になった阿九斗と絢子（じゅんこ）だったが、美津子先生の様子と、阿九斗に向けられる好奇（こうき）の目で、現状と皆の認識（にんしき）を知ることになった。

死んだということを認識していない者が多いらしい。違和感こそあるのだろうが、世界の様相は変化していないし、何より戦争の苦難はここにはない。生活そのものは現実とは変わりないのだし、わざわざ死を認識することに意味はないだろう。

それよりも、阿九斗はクラスメイトの自分への扱いに驚くばかりだった。魔術の能力はまったく衰えていないというのに、魔王として恐れられてはいないのである。

授業は、魔術も一般教養科目も阿九斗にとっては簡単なものだった。それでクラスメイトから羨望のまなざしを受けるのも心地よかったが、そんな低レベルな快感より、自分が人間扱いされているということが心地よかった。

「すごいな、編入生」

「そりゃあ、委員長もベタ惚れなわけだよなぁ、許嫁なんだっけ？　このこのぉ」

「こ、こら！　お前ら、やめろ！」

絢子は顔を真っ赤にして反論するが、恥ずかしそうに顔を埋めたのは阿九斗のシャツの胸だ。二人で修羅場を越えた経験が阿九斗への愛しさへと繋がっているのか、素直に好意を表現するようになっている。阿九斗にもそれは不快であろうはずがない。

「もう少し二人で居ることに慣れてもいいんじゃないのかい、僕ら」

阿九斗がほほえんで言うと、口笛を吹いていたクラスメイトも茶化す意味なしと、満腹した表情で肩をすくめるしかない。

「お前のような危なっかしい奴に慣れることなんてあるものか」
絢子が照れ隠しに吐き捨てるに至っては、周囲の皆もげっぷとともに離れていく。
授業が終われば、報せを聞きつけた江藤不二子が恐ろしい速さで走ってきて、阿九斗に飛びつく。
「阿九斗様ぁあああ！　お会いしたかったですわぁあああ！」
普段おしとやかな不二子の我を忘れたような勢いに、生徒達はどよめく。不二子にとっては苦難の果ての再会であり、泣こうがわめこうが当然なのだが、生徒達にとっては突然のご乱心と映っている。
「ちょ、ちょっと不二子先輩……」
阿九斗が狼狽すると、不二子は少し平静を取り戻したのか、乱れた制服を直し、周囲の生徒達にわざとらしい咳払いを見せる。
「こほん……失礼しました。阿九斗様は、わたくしの幼なじみ。家が隣で、二階の窓から出入りする仲でして……」
不二子がこっそりとウィンクを見せたところからするに、出任せなのだろう。
――やっぱり以前、けーなが世界を巻き戻した時と同じか。
阿九斗はリリィの言った通りだと納得する。事態に深く関わった人間の記憶は消えていない。そうでない者の記憶は消されるか、改変されている。そして、不二子は一足先にこの世界に来ており、後から来た人々の証言との違いに気づいているというわけだ。

「だからって、ねぇ、先輩……」
「いやだわ、阿九斗様……いえね、様をつけるのは、彼こそこの国のトップになるべき男だからでして……二人の時は、お姉様、阿九斗と呼び合うのでして……」
阿九斗に対して、というより周囲に向けて不二子は声を大きくする。阿九斗にも初耳だ。男女双方から悲鳴のような声があがり、阿九斗に対する嫉妬を隠さぬ声があがる。
「ちょ、ちょっと、そんなくっつきすぎです！　先輩……！」
阿九斗と不二子を囲む輪の中から、絢子が飛び出してきて、さらに話はややこしくなるかと見えたが、不二子は涼しい顔で阿九斗の腕に自らの腕をからめると、やはりわざとらしい口調でとんでもないことを言いはじめた。
「あら、服部さん、いえ、絢子ちゃん。ここは仲良くしてくださらないと。だって、一夫多妻の世の中ですよ。阿九斗様は四、五人程度は妻を持っても問題ない器のお方！」
「あのですね、せんぱ……」



不機嫌そうに顔をしかめ、ひとつ木刀でも抜くか、と腰に手をやった絢子だったが、クラスメイトの反応に気づき、ぴたりと動きを止める。

「そうだと思った」

「悔しいが紗伊なら江藤先輩と委員長を二人ともめとっても……」

「あたしも紗伊君の妻になれるかなぁ」

そんな声があがっている。

「んな馬鹿な……」

絢子はぽかん、とする。

阿九斗も不二子の顔を見返した。

不二子は、ひょい、と阿九斗の頭を抱きかかえると、小声で告げる。

「これはホントでしてよ。わたくしたちには都合良く一夫多妻制が承認されておりますの。結婚さえしてくだされば、わたくしたちは本当の夫婦。誰にはばかることなく一緒に住めましてよ」

その声は、すでに艶っぽいものになっていて、不二子がいかに阿九斗を待っていたかが理解できた。

「学生さん、品行の良い夫婦生活じゃなかったらいけませんよってね」

突然に声が割り込んできた。学生達の輪を割ってやってきたのは、淑恵だった。今はスーツの上に白衣を羽織っていて、仕事中だということがわかる。彼女は一般生活においては、学校を飛び級で卒業した天

才で、すでに司祭として働いていた。
「木多さん」
　阿九斗は、これ以上そのままにしておくと何をするかわからない不二子の勢いが弱まったことに感謝しつつ、淑恵に手を振る。
「木多さん、とは他人行儀だね。もうすぐ私たちの結婚式だっていうのにさ」
　いたずらっぽい笑みを淑恵は浮かべた。先日に言っていた「いろいろと違う」というそれの中で最大ものがこれで、それを隠していたというわけだ。
　そして、その甲斐あって、阿九斗と絢子は、記憶違いを周囲に悟られぬようにしておいた方が無難であることも忘れて声をあげた。
「結婚！」
「はは、日程を忘れていたかい？　そもそも阿九斗君は卒業資格を得るためだけにここにいるのだからさ、はやくテストをクリアして卒業したまえよ。どこの神殿も君を待っているぞ。宗派に縛られぬ君専門の役職を作ることも検討されているんだからね」
　淑恵は、矢継ぎ早に阿九斗にとっての新事実を告げる。
　阿九斗は情報を処理しかねていたが、自分のかつて見た夢がここにあるのだと気づきはじめていた。実感はまだないが、ここまで体験したことに比べれば、与えられた職務をこなしてこの幸福を維持することなど簡単なのではないか、と考える。

――入学する前の……魔王と告げられる前の夢……。

陶然(とうぜん)とするような待遇(たいぐう)が目の前にある。他人のために役立つことができる。そのための力も有り余るほどに持っている。そして、自分のことを本当に理解し、愛してくれている三人の女性……。これ以上は望めまい。

「いいのかい、本当に……」

阿九斗は誰に言うともなくつぶやく。

「いいのさ」

「いいんでしてよ」

淑恵と不二子が満面の笑みでうなずく。

それを見て、絢子の表情が強(こわ)ばったものから、段々と緩(ゆる)みはじめる。

「な、なんだというんだ……。みんな、やめてくれないか……恥ずかしい、何か……」

絢子が自らの腕に顔を埋めた。小刻みに震(ふる)えていた。

「泣くなよ。まるで、今まさに幸福を知ったみたいな顔だよ」

淑恵が意地悪く茶化した。

「こりゃ、僕は何も言えないな……」

阿九斗は照れて笑う。

彼らを囲んでいたクラスメイトたちの誰かが拍手をはじめ、それはやがて廊下中に広がった。そこが人気歌手のステージにでもなったかのようだった。

「そうそう、私は新居が完成したと君たちを呼びに来たんだった」

淑恵が外に出よう、と立てた親指を振った。

群衆が左右に分かれて道を作る。笑顔で阿九斗たちを送り出す。ここが学校でなければ、彼らは花でも頭上に撒いたはずだ。

人のアーチを抜け、四人は校庭へ。淑恵が裏庭に止めたという地上車に歩を進めていくと、人気のない渡り廊下のあたりで、声をかけてきた一群があった。

一群というのが確かにふさわしい集団だった。制服を着崩し、周囲を威嚇するためにセットしたとしか思えぬ奇抜な髪型をした男子生徒ばかりだ。

——幸福ばかりじゃないって、感じかな？

阿九斗は、その集団のリーダーらしきひときわ体格の大きい人物に目をやった。

不良としか言いようのない彼らのうち、最も凶悪な顔をした巨漢が前に進み出てきた。

「よう、どうにも気に入らねぇんだ。どうにも。俺らみたいなのは、何も持ってない人間なんでな、お前みたいな何でも持ってますみたいな奴が」

野太い声でそう言った男の名前を阿九斗は思い出す。

——タケシ……だ。懐かしいな。

確か、不二子の手下で、生前、真っ先に阿九斗に絡んできた人物だ。

阿九斗は不二子の顔を見る。不二子は「こちらでは無関係」と小声で言って首を振った。

「なるほどね。喧嘩かぁ。喧嘩だよね。どういう風に加減するんだっけ？」

阿九斗は、心底からの笑みを浮かべた。ここでの自分にも敵対者がいたという奇妙な安心感があった。思い通り過ぎては不安になる。この先にももめ事や思い通りにならないこともあるのだろう。それは幸福なことに違いない。

「何をふざけたことを言ってやがる……。てめぇみてぇな坊ちゃん育ちが見たことのないような地獄をこっちは見てるんだ。お綺麗なやり方じゃ俺たちにはかなわないぜ」

タケシは、自分たちが負けるなんてことを考えてもいないのだろう。サディスティックな笑みを浮かべている。

――あ、特殊警棒と詠唱銃なんて隠し持ってる。他の全員も合図でかかってくるつもりか。ナイフが二人で、あとは全部バットとかバール……と。

阿九斗は一瞬で彼らの心づもりと服の下の得物を透視し、どれほどの魔術の使い手かも理解した。それをわかった上で、タケシに微笑みかける。

「細かいことは言いたくないけど、やめようよ。とりあえず何の得にもならないし」

その言葉を無視するように、へへへ……とタケシは笑い、ゆらゆらと阿九斗に近づいてきた。

「俺の得にはなるのさ。お前は損ばかりだがな」

タケシの言葉に、取り巻きたちは声をあげて笑った。
と、予告なくタケシが殴りかかってきた。
不意打ちだったが、阿九斗は、それを首を傾けただけで避ける。
「危ないってば」
その怯えも何もない態度がタケシを怒らせた。
「てめぇ、ちょっとはやってるらしいな……」
取り巻きたちに顎を振る。彼らは阿九斗たちを取り巻くように大きな輪を作りはじめた。一斉にかかってくるつもりだ。
「卑怯な」
絢子が顔をしかめて声をあげた。
取り巻き達は、絢子の態度を見て、いやらしい笑みを浮かべた。
「おお、おお、可愛いねぇ」
「怖がらなくても、女の子はぶったりしないよぉ、気持ちよくしてあげるだけさ」
下卑た笑い声に、絢子は顔色を変えた。木刀でなく、真剣に手をかけかねない表情だ。
阿九斗は首を振った。
「ぶちのめしても駄目だよ。僕に任せて」

今の絢子なら、この一群すべてを叩きのめし、場合によっては殺してしまうかもしれない。
「だが……」
絢子は口ごもった。
「大丈夫。僕も経験を積んだんだ。叩きのめしても、こういう連中には恨まれるだけだって知ってる。となれば……」
阿九斗が長々とそんなことを言っているうち、タケシは我慢ができなくなったらしい。
「ごちゃごちゃ言ってんじゃねぇ！」
叫ぶと、右手を振り回してきた。かわしやすい大ぶりのフックだった。
だが、それには仕掛けがあった。パンチは見せかけだ。袖に仕込んだ特殊警棒が本命の攻撃。先ほどのようにフックを首だけで避けようとしたなら、袖から滑り出した警棒が直撃するハメになる。
阿九斗はそれに最初から気づいていたので、一歩踏み込むとタケシの腕を片手でひょいとつかむと、軽くひねって空中に投げあげた。腕を、ではない。タケシの身体ごと空中に投げ飛ばしたのだ。
「ひゃ？」
疑問系の悲鳴をあげて、タケシは宙に舞った。この魔術の名門である学園の生徒にとっても飛行術は難しい部類に入る。まして不真面目な学習態度の面々では、不意のことには対応できない。タケシの身体は、イルカショーで跳ね上げられたビーチボールのごとく青空に吸い込まれていく。
「え？」

ぎょっとする取り巻きたちの、その一瞬の隙が命取りだった。
阿九斗は、彼らの前に瞬時に移動し、みぞおちに拳を軽くめり込ませる。相当に手加減はしていたが、それでも彼らは阿九斗が目の前に現れる度に次々と悶絶していく。
結果、八人居た彼らは、全員がタケシが落下してくる前に、地面で転げ回り、うめくことになった。
最後に落ちてきたタケシの首根っこを片手でつまむと、顎の先を人差し指ではじく。太い首を中心に、ぐるりとタケシの頭は半ばまで回転し、激しく揺すられた脳は、その活動を一瞬だけ停止する。つまり、タケシは気絶した。
阿九斗はタケシを不良たちの横に無造作に横たえ、満足したようにうなずいた。
「殺してないのは、いいけれど……恨まれるってのは同じじゃないのか?」
絢子が呆れて声をあげた。
「少なくとも喧嘩をする気はなくなっただろ。それに、この後の対処も考えている」
「対処って、どんな?」
「宗教……かな？　古典的なそれを復活させればいい。彼らは他人への共感が欠落しているし、後先も考えない。そういった人々には生きる目標を与えてやればいいんだ。何か目標さえあれば、そういった人は盲信するものさ。本質的には、物を考えられず、苦しみを自らの責任として受け入れられぬ者のために古典的な宗教はあるんだから」
ひどく冷淡なことを阿九斗は言った。

「それでなんとかなるものなのか……？」

絢子は阿九斗の態度にひるむ。時に彼はひどく残酷になることに、まだ慣れているとはいえない。

「今までのシステムだって、盲信した人はいたさ。だが、今なら、よりホンモノの神の存在を信じられるだろ？　だって、誰かがこの死後の世界を作ったと考えなければ辻褄が合わないんだから……。彼らは神学でも研究するといいのさ」

阿九斗は言い、生徒手帳を使って、生徒会長であるリリィに連絡を入れる。

《はぁ？　父を通じて教会に別部門を作れ？　そして、その部門の責任者を君にしろ？》

大司教であるリリィの父には、その権限がある。過去のデータからも、これまでのガバナンスからも、古典的な宗教を再現することは容易なはずだ。

阿九斗は当面の仕事が見つかったことに満足げにうなずいた。

「時間の観念がどうなっているかはわからないけれど、数年はかかるだろうね、教育にはさ」

予言のように阿九斗は言った。それは予言ではなく、予測だったが、それだけに外れるはずがなかった。

「数年？　そんなに経ったら、もう卒業しちゃうんじゃないか？」

絢子が言った。

「あら？　阿九斗様はもう卒業するつもりだったじゃない。それに、そうなったら、わたくしたちの新しい生活のはじまりでしてよ？　ほら、新居が用意されているんでしょう？」

不二子が淑恵に言葉を促すように顔を向けた。

「そういうこと。さっさと行こうか」
　淑恵は先に立って歩き出した。
　学園駅から列車に乗って二駅。帝都都心からほど近い高層ビルに淑恵は入った。グランドフロアからセキュリティが厳しく、一定の品行の者しか入れないロックが自動ドアには施されていた。ビル内は選別された者専用の居住空間だった。
「最上階の六十階が全部、私たちの家だ」
　淑恵はエレベーターのボタンを押しながら言った。
　阿九斗はグランドフロアを見回す。そこはブティック、カフェ、宝石店などテナントの多数入ったショッピングモールで、ワンフロアといえば、かなりの広さになる。
「全部？」
「屋敷を建てるより目立たないし、住居内では階段の上がり下りをしなくていいしね。庭は人工の物になるけど、水槽も花壇もある。動物を飼うのも悪くないね」
　最上階のボタンは阿九斗たち以外入れないようにロックされていた。淑恵が先導して扉を開けると、そこは直線的なモダニズム様式の空間で、住居としては阿九斗たちが最も馴れ親しんでいたそれだ。
「私たちの個室と、阿九斗君の部屋は別々になっている。クローゼットもユニットバスも各部屋にあるから、そこで生活は完結しているけど、リビングは当然のこと、中庭も浴場もプールもあるから、そこで過ごして欲しいな。後は……」

一通りの部屋を説明した淑恵は、悪戯っぽく笑い、最後の一部屋の扉に手をかけた。
「寝室」
そこだけはロココ調の豪華な天蓋付きダブルベッドがあった。奥にガラス張りのシャワールームとユニットサウナ。天井は鏡張りで、間接照明の明かりがオレンジ色にギラついている。
「これは……なんだ……その……」
絢子が顔を赤くして口ごもる。
「あなたもやりますわね！　ここがわたくしと阿九斗様の専用寝室ということですのね！」
不二子が感極まって甲高い声を上げた。
淑恵は即座に否定する。
「ここは共同だよ」
「共同ですって？」
「うん。まぁ、共同というか、共用というか」
「4P？」
「そこは趣味によるかも。私は……問題ないな。うん、問題ない」
「……わたくしは、そっちは趣味じゃありませんわね。やはり一人で阿九斗様を独占しないと」
「そういうことなら、時間制とか……交代制とか」

不二子と淑恵が怪(あや)しげな相談を開始したので、絢子はうろたえながらも割って入る。

「こ、こら！　何を話している！」

「何って、生殖(せいしょく)活動の方針についてだが。通常、有り得ないとされている形態だからこそ協議をしておかなければならないわけで……」

「何を純情ぶって。あなただって抱かれたいでしょうに」

淑恵も不二子もそれぞれの理由で鬱陶(うっとう)しそうに鼻を鳴らす。

「だ、だからといってな……」

絢子は言い返す言葉が見つけられずにいたが、その場をこっそりと去ろうとしている阿九斗の背中を見つけ、大声をあげる。

「……お前が不甲斐(ふがい)ないからこうなるんだ！　全員で祝言(しゅうげん)をあげるぞ！　それからなら一切(いっさい)の文句はない！」

これには、淑恵と不二子も表情を変える。二人して蛍光(けいこう)ピンクの雰囲気(ふんいき)をまとわせていたのが、バラ色の乙女(おとめ)の雰囲気へと。

「結婚！」

「ウェディング！」

「契(ちぎ)り！」

「祝言だ、祝言！」

絢子がけしかけると、今度は阿九斗を除く全員がリビングへと向かっていく。豹変（ひょうへん）ぶりに、何事かと後を追った阿九斗だったが、仲良くリビングのソファに転がってマナスクリーンに結婚式場の案内を映し出しはじめた三人に、理解力の限界に達したのか、肩（かた）をすくめて寝室のドアを閉じに戻（もど）った。

その晩から、奇（き）っ怪（かい）な、しかし、阿九斗にとっても落ち着いた生活がはじまった。

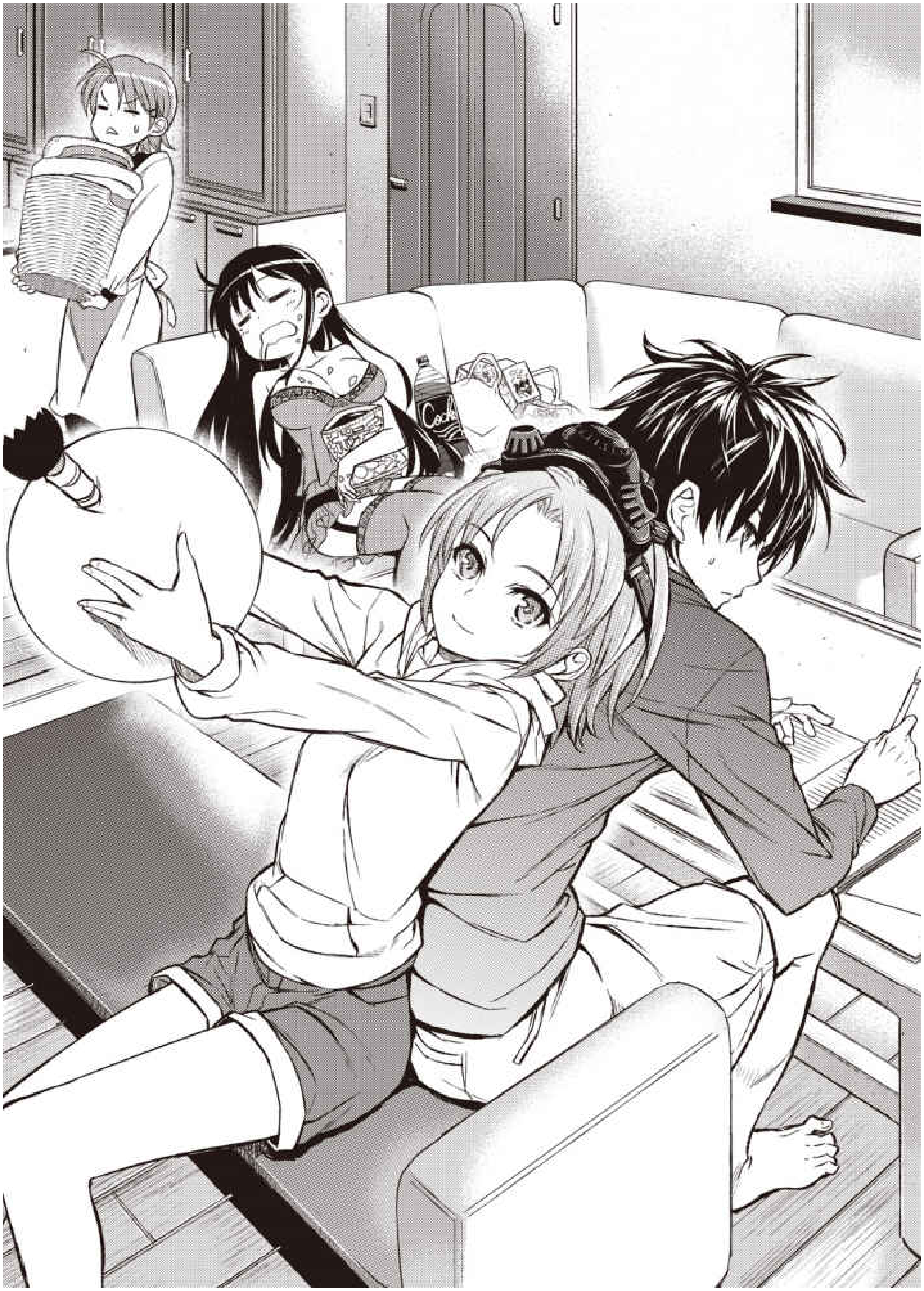
昼間は阿九斗が仮に名付けた『純粋教会（じゅんすいきょうかい）』設立のための仕事と学業、そして夜は、阿九斗と前後して帰宅した三人による世話を受けるというもの。

すでに気心が知れているとはいえ、共に生活するということは、相手の意外な側面を知るということでもある。

淑恵は、思ったよりも人懐（ひとなつ）っこい性格で、阿九斗以外にも不二子、絢子が相手でも、身体をくっつけたがる癖（くせ）を持っていた。それでいて、気まぐれで自分勝手なところがあり、自室に据（す）え付（つ）けたコンピュータでの研究に没頭（ぼっとう）すると誰が呼んでも出てこないし、不二子が気を引くべく冗談（じょうだん）めかして首筋をくすぐった時には真顔で怒ったりすることすらあった。

不二子は見た目通りといえばそうなのだが、一度心を許した相手には自分をさらけ出しすぎて怠惰（たいだ）になってしまうところがある。炊事（すいじ）、洗濯（せんたく）、掃除（そうじ）、などの家事については、気分が良ければやるが、乗らないと完全に絢子任せ。さらには駄菓子（だがし）の袋（ふくろ）を放置し、食べ残しもそのまま。あげくにそれを捨てると「まだ食べるつもりでしたのに！」と怒り出すこともある。それでいて阿九斗には完璧（かんぺき）な男であることを要求し、阿九斗もそれに応（こた）えてしまうものだから、端（はた）で見ていた淑恵と絢子が怒り出すのが常態化していた。

絢子は絢子で、すぐに潔癖症(けっぺきしょう)が顕(あら)わになった。家事を自分ばかり担当していると愚痴(ぐち)るが、整頓(せいとん)されていない状況(じょうきょう)に真っ先に我慢できなくなるのが彼女で、外注できる部分すら自分でやらないと落ち着かないのか、業者がサービスにやってくるサイクルよりも早く、掃除、洗濯を済ませてしまう。外食も嫌(きら)っており、「栄養バランスが悪い」と食材調達から自らの手で行っているという具合。だが、心を開くことは苦手のようで、なにかと阿九斗にくっつきたがる不二子と淑恵を引きはがしはするものの、自分がそれに取って代わるかといえば、そんなこともない。しかし、阿九斗と一定の距離(きょり)をおきながら、彼に熱い視線を投げかけて息を荒(あら)らげている時もあり、さながら室内ストーカーといった具合。もちろん不二子などは気味悪がって絢子と阿九斗を抱きつかせようとさえするのだが、暴れてでも逃(に)げ出していく絢子に半ば呆れているという始末だ。



それでも、阿九斗にはこの状況すら好ましく思えている。自分が努力すれば改善できるからだった。絢子の家事に付き合うことで彼女が嫌（いや）がらない接触（せっしょく）機会を増やす。不二子には学業以外の仕事を与（あた）えることで規則的な生活を促す。そして、淑恵とは深夜に絢子たちのついてこれぬ会話をすることで性的な話題を遠ざける。

通常ならば、エネルギーが尽（つ）きてしまうような行動だが、阿九斗にはそれが可能だった。そのおかげで平穏（へいおん）に日々は流れた。

そして結婚式は盛大に行われた。どの宗教形式で行われるかはもめにもめたが、結局、すべての形式で行われることとなった。

当日はイベントホールを貸し切り、オーケストラの生演奏のもとウェディングドレスの三人が登場するという趣向（しゅこう）だった。招待客は知り合いと親族に限られたが、それでも客席は満員。花嫁（はなよめ）三人の美しさに息をのむことになった。

盛り上がったのは、当然ながら誓（ちか）いのキス。淑恵はスムーズに、不二子は熱狂的（ねっきょうてき）に、口づけを交（か）わしたが、絢子だけは、まさに、その瞬間まで逡巡（しゅんじゅん）していた。

「こ、こんな大勢の前でか？」

というのが絢子の言い分で、不二子は当然のこととして、阿九斗さえも、さすがに覚悟（かくご）を決めろと言ったくらいだった。

最終的にキスをする決め手になったのは、阿九斗の言葉だった。

「初めてのキスなのはわかってる。だから、最高の場所でできるって思わないと」
　そして、絢子は目を閉じ、静かに阿九斗の唇（くちびる）を受け入れた。
　白無垢（しろむく）、角隠（つのかく）しでの式も終え、披露宴（ひろうえん）がはけてから、車で立ち去る頃（ころ）には日が暮れていた。新婚（しんこん）旅行こそなかったが、夜になって帰宅した阿九斗らは、世界の頂点にいるような心持ちだった。
　望む物は何でもある。
　金で買える物は無尽蔵（むじんぞう）。
　快適な気候。
　金持ちの誰もが望むことになる、金では買えぬ冒険（ぼうけん）と愛さえも阿九斗の手の中には、しっかりと握（にぎ）られているのだ。
　黄金の日々。
　大いに食べ、飲み、笑い、怒り、愛し合った。
　特に、若い阿九斗にとっては、夜の生活は刺激（しげき）の強いものになった。
　阿九斗とベッドを共にするのは、三人が一日おきに、絢子、不二子、淑恵の順番とくじ引きで決まっていた。
　最初の日、絢子は両手で顔を隠していた。二人全裸（ぜんら）でベッドに入ったことは一度だけあったが、あのときは下層異空間で小説を再現しなくてはならないという奇妙な状況だった、と阿九斗は切り出す。
「確か、バラの花弁を指でいじったんだっけ」

阿九斗が言うと、絢子は笑い、ようやく顔から手をどけた。
顔を見合わせて笑った後、気まずい沈黙。
「本当にするのか……？」
と、絢子。
「したい」
と、阿九斗。
照れ笑いの後、絢子が阿九斗にしっかりとしがみついた。
それから、言葉を交わす余裕はなかった。絢子は阿九斗の下になり、手足をしっかりとからめ、顔を見られまいと身体全体を密着させる。阿九斗も余裕無く、ただ互いの湿り気を下腹に感じたことで、ポルノで見たような行為が必要かどうか戸惑いを覚えたが、粘膜の先端のふれあいに絢子が何も言わなかったので、腰を沈めようとした。
と、絢子が身をよじった。ベッドを上にずり上がっていく。阿九斗は頭を押さえるのも暴力的だと一緒に上に。再び先端が絢子に触れ、ぬめりとした感触が阿九斗の背筋を震わせる。
絢子は短く強い息を吐き、さらに身をよじった。ベッドをずり上がる。阿九斗も再びそれを追う。その無言の動きが数度繰り返された。
それは結局、絢子が頭をベッドの天板に打ち付けたことで終わった。
「いたっ……」

絢子が素に戻った声を上げる。
阿九斗は笑った。
絢子も苦笑いを浮かべる。
「い、嫌なわけじゃないんだ……」
絢子が言い、阿九斗の身体を放すと、乱れた羽布団とシーツを伸ばし、位置を元に戻した。阿九斗も、もぞもぞと身体の位置を戻す。
再び抱き合うと、絢子がまた「ひゃ」と声をあげた。お互いの下腹部が触れ、その冷たさに驚いたのは阿九斗も同じだった。
「こ、こんな風になるんだな……。考えたこともなかった」
絢子は二人の思わぬ水分に戸惑い、阿九斗もそれにうなずいた。
「大丈夫?」
阿九斗が聞く。こんどは、絢子が小さくうなずいた。
腰を沈めていく。全体が包まれる感触があったが、そこで抵抗があった。
絢子が小さくうめいて、しがみつく手足に力を込めた。
阿九斗が身体を静止させると、絢子は小さくつぶやく。
「いいから」

阿九斗は絢子の頭を抱きかかえると、腰に絡みついた足が絞(しぼ)り込まれるのに任せて、身体を落とし込んだ。

絢子が喉(のど)を見せつけるようにのけぞった。

○

時間跳躍(ちょうやく)の理屈(りくつ)はさておき、実行自体はさして難しいものではなかった。モード変更(へんこう)を施されたブレイブ・スーツには、数値と場所を入力するだけで、その場へと移動できる機能が備えられていたのだ。

しかし、それは時間跳躍が幾度(いくど)も行われた証明でもある。すなわち、望一郎(ぼういちろう)の言葉は真実である可能性が高いということだ。

《君は何度でもここにくるだろう》

――やり方がまずかっただけさ。

ヒロシは、以前に不二子が見つけていた研究所――最初にマナ文明(ぶんめい)が生み出された場所だ――を最初のターゲットに選んだ。資料が揃(そろ)っていたこともあり、年代の特定も容易だ。そして、どの書類やデータを破棄(はき)すれば、研究が頓挫(とんざ)するかもわかっていた。当時、予算的に苦しかったマナ研究は、少しの遅延(ちえん)も許されない状態になっていたからだ。

ブレイブ・スーツのまま、研究所に押し入った。警備員はいたが、銃器は携帯していなかった。ヒロシはレーザーを最小出力にして、警備員を気絶させた。

資料と該当するデータの入力されたコンピュータを探す。この時代はデータが作られるごとに逐一プリントアウトがファイリングされていた。結論としては、部屋ごと焼き尽くすしかないようだった。

部屋に爆発するようなものは一切無い。コンピュータと書類を積み重ね、書類を燃やすのが一番効率が良い。

ヒロシは書類の山を作り、その上に乱暴にコンピュータを積んだ。火災報知器のセンサーを単分子カッターで壊しておいてから、レーザーで書類に火を付け、コンピュータのプラ・ケースが溶けて、火がついたのを確認する。

都合、残り三部屋を焼かなくてはならない。が、最後の一部屋になったとき、さすがに火事に気づいた者が通報したのか、警官が武器を携帯してやってきた。

——場合によっては、殺さなくてはならないのか……？

ヒロシの心を不安がよぎった。が、それはすぐに杞憂に終わる。警官は実体弾のリボルバーのみを武器としており、それを処理するのは容易なことだった。マナスクリーンは使えないが、オートに設定したレーザーが弾丸をすべて蒸発させてくれた。

警官は怯えていた。それ以上、抵抗してこないことは幸いだった。

——殺すまではしたくないもんな。

心中でつぶやく。
しかし。
——俺は人類を救う……んじゃなかったっけ？
そう思うとぞっとした。
今行っていることは、自分の中の基準でも犯罪だ。警官に抵抗し、書類とコンピュータを火にくべている。この行為と、殺人までの距離はそう遠くないことのように思えた。
——望一郎は殺人をしていたはずだ。
少数の犠牲で多数を救う。簡単な計算だ。
しかし、物語の中では、決して肯定されたことのない決断でもある。
この世界が誰かの物語である可能性はずっと考えてきた。それでも、いや、それだからこそ、簡単な計算で出せる正解は肯定されなければならないはずだ。それが倫理だ。恋人と全人類を天秤にかけて、恋人を救うことを決断するような物語ばかりが世の中に流布してきたが、本来ならそれがひろまって良いはずがない。
それでも、そんな物語が受け入れられているからには、自分のしていることは一般には受け入れられないことなのだ。
後ろめたさからくる背筋の冷たさを、孤独がさらに加速させた。

警官が見ている前で仕事を完遂するると、ヒロシはすぐにブレイブ・スーツを元の時代へと移動させることにした。

○

「二日も間が空くんですわよ！」

阿九斗にしがみついた不二子は、自分がさも苦しかったかのように言うのだった。

「たった二日、と思ってくれないと」

「いいえ、二日も、です」

不二子が文句を言った。この日のためにあつらえた黒い下着姿でベッドに横たわると、目を輝かせ、阿九斗に向かって両手を広げた。

さも慣れているかのように振る舞っているが、阿九斗は先日、彼女が絢子を詰問していたことを知っている。

「抱かれたとき、どんな感じでしたの？」

「ほら、アレもさぞや逞しかったでしょうね」

「痛みはどのくらい持続しました？　……いいえ、わたくしの経験は関係なくってよ。阿九斗様のモノが特別だからこそ聞いているの」

などと、淑恵と二人して詳細(しょうさい)を聞き出そうとしていたのだ。もちろん答えない絢子に、最後には、詰問というか、ほぼ拷問(ごうもん)を行っていた二人である。

もちろん、そんなことをしている不二子に経験が豊富であろうはずがない。

かといって、自分にも余裕があるわけではない。絢子相手のときはお互いに何をする余裕もなかったので、考えることはなかったが、今回は違(ちが)う。不二子に余計な負担をかけてはいけないのではないだろうか？

抱いた身体に手を這(は)わせてみると、思いがけず言葉が出た。

「人によって、身体ってずいぶん違うね」

「なっ……」

不二子が抗議(こうぎ)の声をあげた。

「こ、こんな時に、他(ほか)の女の話をしないでくださいまし！」

「ご、ごめん。君の方が、その、ホントに女の子だなって感じがして……」

実際、どこまでも沈み込んでいきそうな柔(やわ)らかさは不二子に独特のものだった。絢子の身体は内側から押し返してくるような張りがあった。二人の身体への触れ方(かた)も明確に違うものになるべきだと思えた。

その言葉が功を奏したのか、それとも口をふさいだのが良かったのか、不二子はそれ以上の抗議はしなかった。

阿九斗は大柄(おおがら)な不二子の身体に体重を預けた。水に入ったような感覚と、ぬるい油を塗(ぬ)られたような感触が上半身を覆(おお)う。

不二子の身体の隅々（すみずみ）まで、撫（な）でるというよりは、揉（も）んでみる。不二子の嬌声（きょうせい）が変化する部分を重点的にいじっていると、今度は不二子の方が阿九斗の身体に手を這わせてきた。

阿九斗の脇腹（わきばら）から腰（こし）へ指が伝う。その部分をことのほか不器用に握ると、いずこかへ導こうかというように動かした。身体の位置を調整し、腰を沈めると、それこそ全身の皮膚（ひふ）がぴったりと粘膜に包まれるような未知の感触があった。

二人して快感に打（う）ち震えていたのだが、先に動き出（だ）したのは不二子だった。

挑発的（ちょうはってき）な笑みを浮かべると、下から身体を突（つ）き上げてきた。

○

マナ文明の根源を無くしたはずだった。

それでも、過去は改変されていなかった。

いや、正確には、過去は改変されていたのだ。

「マナ文明の発祥（はっしょう）が変わった？」

ヒロシは、目の前にいる望一郎に聞いた。

「研究所のデータがサルベージされたわけではない。非番だった博士が、メールデータを受け取っていたのだ。そこから博士が単独でマナを開発したという美談になっている。それが〝いま〟の歴史だ」

望一郎は、薄笑いを浮かべていた。悪魔的なそれ、とも見えたが、慈愛の笑みにも見える。いずれにせよ、「自分には結果が分かっていた」という笑みだ。

それにヒロシは逆上した。

「セキュリティの面から言っても、博士がデータをメールで受け取っていたなんて有り得ないじゃないか！」

望一郎は肩をすくめた。

「ああ。もちろんわかっている。しかし、どんな事情があったかなんて今じゃ知るよしもないのさ。そいつが歴史ってもんだからね」

「ねつ造されたみたいなことを言わなくてもいいじゃないか」

「いや。ねつ造なのさ。本当に」

「本当に？」

意外な一言に、ヒロシは目を見開く。

「ああ。歴史を知ることは当事者でないとできない。私たちは、そこにいなかったのだからね。何者かが強引に歴史を書き換えていても、知ることができるのはその情報だけだ」

「それじゃあ、どんなことでも真実なんてなくなってしまう！」

ヒロシが声を荒らげた。

「無いんだよ。真実なんて。ここが物語的な世界なのだとしたら」

「じゃあ、前に説明していた時間論は……」

「そうさ。どこかを変更すれば、それに対応する何かがどこかに適宜挿入される。変更されるんだ。何者かによって」

信じがたいことではある。だが、ヒロシには確かめる手段はあるのだから、望一郎が嘘をつく必要はまったくない。

何者か、というのが自同律のことであれば、ずいぶんと意地の悪いことだ。そもそも世界を改変させないつもりならば、この世界は滅びに向かっているはずだ。滅ぼすまいとしているのなら、そもそもヒロシの行動が支持されてもよいのではないだろうか。

ヒロシは、そんなことを考えると、暗い気持ちがわき出してくるのを感じた。

人を殺せば、あるいは——

そこまで重要な、取り返しのつかない歴史改変なら、自同律も防げないかもしれない。殺人には抵抗感はあるが、そもそもここが本当に死後の世界なら——確証は一切無いわけだが——問題はないのではないか。ここに来るタイミングが違うというだけなら、殺人は取り返しのつかない行為ではないようにも思える。まして、一人の犠牲でどうにかなることなら。

「そういえば、結局、あんたは重要な人物の殺害には成功していなかったよね？」

ヒロシは挑発的に言った。

望一郎もそれが何を意味しているのか理解し、不思議な微笑をたたえた。

しかし、互いにそれ以上、何も言わなかった。

○

淑恵の場合、緊張(きんちょう)も相当なものだったはずだが、それを興味が上回ったようだった。
阿九斗の身体をしげしげと見、触れては、特にその部分の反応を楽しんでいる。
「知識ではわかっていても、やっぱり違うものだね」
淑恵はタオルケットにくるまり、そこから手と頭だけ出した格好で、ベッドに全裸で座(すわ)っている阿九斗の前をいじっていた。
「さすがに、そうやっていじられるのは……」
阿九斗が文句を言う。
「でも、よく知っておかないと」
淑恵は平然と返す。
これには、阿九斗も少し意地悪にならざるを得ない。
「そういうことなら、お互いによく知っておかないと、だよね」
阿九斗が淑恵の背中に手を回し、タオルケットをまくりあげる。
「ひゃ」

白い肌が顕わになり、それを隠そうと、淑恵はもがく。阿九斗がタオルケットを自らの方に引き込んだので、結果的に阿九斗の身体に抱きつくような形になってしまう。
「裸くらいで恥ずかしがらないタイプだと思っていたけど」
「こんな時なんだ……わかれよ」
淑恵は照れるが、阿九斗は容赦しなかった。今度は二人してタオルケットをかぶって、淑恵の足を押さえつけた。
「知識ではわかっていても、やっぱり違うものだね」
と、台詞を返し、淑恵のそれに手を添える。
「悪かったよ。謝るから……」
淑恵は身をよじったが、阿九斗の力にかなうわけもない。
「足の指と指の間をいじっているだけさ」
「親指と親指の間、とか言うつもりかい？」
「古い冗談で悪かったよ。でも、こんな風になってるんだ、って驚きはあるね」
阿九斗は笑うと、淑恵と正面から抱き合った。
「意地悪だな、君は」
「意地悪？　完全な悪だって呼ばれたこともある僕だしね」
阿九斗は淑恵のタイミングを窺わずに身体を沈めた。

淑恵が驚きと、また別の感情の入り交じった、言葉にならない声をあげた。

○

ヒロシは赤(あか)ん坊(ぼう)の阿九斗を抱いて逃げる黒魔術師(まじゅつし)の女を撃(う)ち落(お)とした。

阿九斗の死を確認し、落下によってつぶれた乳幼児の死体から目をそらした。

## 3　今はなき多くの可能性たち

日々は流れていく。

死後の世界での日数がどんな意味を持つのかわからないが、季節の移り変わりは五年の経過を数えていた。

年齢を重ねたはずの阿九斗たちは、それでも以前のままだった。阿九斗は老化とは無縁だろうが、他の者も老化しない、というよりは、成長しない、といった印象のまま日を重ねていた。

コンスタン魔術学院は生徒がすべて卒業し、廃校となったが、施設は公民館として存続し、教師は職員として残留、あるいは他の公共事業に就職した。

都市は発展し、人間関係は微妙に変化していく。それでも人々の構成は変わらない。新たな死者がいないからだ。そして、老化し、死なないからだ。

そして何より、この世界を抜け出す方法は一切見いだせなかった。

「明日の体調に良くないと思うんだ……その……嫌いになったわけじゃないぞ」

絢子がベッドに入った阿九斗に言った。

　あれから三人と何度抱き合ったが知れないが、いつまでも新鮮な驚きがあるわけではない。一年間程は阿九斗は毎日夜の活動を行っていた。三人個々人にとっては二日の間が空く以上、彼女らの欲望は飽くことを知らなかったが、二年目ともなると落ち着いて話をするだけの日も増えてくる。

「体調が悪くなった時って、あるかい？　……いや、純粋な疑問として聞いてる。すごくしたいってわけじゃなくて」

　阿九斗は言った。絢子と顔を見合わせた。

「まぁ、ないけど……。うん、ない。太ったり……はするけどな」

　絢子は少し考えた後に言った。

「明日の自分は、今日の自分とは別人……って考え方があるよね」

「ああ。そうだな。でも、その変化がないってことはどういうことなのか……って、言いたいのか？」

「うん。明日には細胞の何パーセントかが入れ替わる……と知識では知ってる。でも、ここではそういうことがあるんだかないんだかわからない。ただ、僕らの関係性は進展して……少し変わった」

　阿九斗はひょいと絢子にキスをした。しばらく舌をからめてから顔を離した。

　絢子は目を細めて、言う。

「今日はしないって言ったぞ」

「……君は照れなくなった。もちろん、それで構わないんだけど、こっちに来るまでは、君はキスなんて許してくれなかったほどさ」

　阿九斗が言うと、絢子は表情を硬くした。
「嫌いになった……とか言わないよな？」
「不安がらせてごめん。どんどん好きになったりすることだって気持ちの変化ってことに変わりはないさ。ともかく、身体は変わらないのに、気持ちだけは変わっていく」
　阿九斗が真剣な顔で言うと、絢子はうなずいた。
「それはそうだけど……なんでそんな不安になるようなことを言うんだ？」
「段々気になってきたんだ。この世界の正体ってものがさ」
「よしてくれ……」
　絢子は不安を顔に浮かべた。自然なものというよりは、阿九斗に見せるために作った表情だった。
　阿九斗はそれを承知で、首を横に振った。
「わかるけれど、僕だって怖いんだ」
「怖い？」
「幸福っていうのは、たとえば、今の僕らのようなことだと思う。やりがいのある仕事があって、人々から認められていて、愛し、愛される人がいて……」
「私は心変わりなんてしないぞ」
　絢子は慌てたが、阿九斗はそれも否定した。
「わかってる。そういうことじゃない」

「幸福が続くことが怖いってこと?」
「それも違う。永続することへの恐怖なんだ。僕らはもう死なない。僕らはもう心変わりをしない。つまり、それは……僕らはもう終わってるってことだ」
　阿九斗は、言いにくそうに唇をかんだ。
「終わってる……?」
「僕らはこのままでは何も新しいものを生み出せない。不良を更生させようとはしているけれど、それは古いメソッドだし、奇妙なほど僕の想像の範疇内に収まっているんだよね、彼らの行動は。つまり、僕のやるべきことは、もうほぼない」
「でも、やりがいはあるって……」
「うん。だけど、それは僕にとっては単純作業に近いよ。飽きなくていいけどね。でも、僕にとって新規な行動じゃあない」
「だからって終わってるって、どういう……。むしろ死なないことが怖いとか?」
「似ているけど、たとえば……いや、実際に手に入っているのかもしれないわけだけど、永遠の命があったら、何をする?」
　その問いに、絢子は首をひねった。
「考えたこともないな。でも、退屈には違いない。そういうことなのか?」

「退屈とも似ている。でも違う。僕はずっと考えていたんだ。こんな身体だからね。永遠の命は、退屈だから怖いのだろうかって。そうじゃなかった。怖いのは、僕にとってのすべてが終わっているのに、まだ続けなくちゃならないことだ。話すことがなくなっているのに話し続ける。書くことがなくなっているのに書き続ける。不良の更生もそうだ。彼らは僕の教えられた通りに話すようになるだろう。それは僕のエコーに過ぎない。恋愛もそれに似ている。僕らはひとつになって、分かちがたいものになる。だけど、それは終わりなんだ。それでも、続けなくちゃならない」

阿九斗は堰を切ったように話し始めた。

「何のために続けるって？　生活を続けるだけなら、ゆっくり過ごせばいいだけじゃないか。それとも何をするって……。阿九斗、ちょっとおかしいよ」

絢子が心配顔で阿九斗の手を握る。

阿九斗は絢子の目を見返した。

「僕らが物語の登場人物だとしたら、僕らはもう終わっているんだ。それ以上何かを……たとえ静かに過ごすにしても、何かをしないといけない。その何かをしないといけない理由……すなわち、真理ってやつを探さなきゃいけない」

「だから？　何のために？　いいや！　誰のために？」

絢子の声はほとんど怒鳴り声になっていた。

それでも阿九斗は静かにうなずいた。

「それさえも探しに行かなくちゃ」

絢子は、もうあきらめたかのように何も言わなくなった。

翌朝、阿九斗が目覚めると、絢子はもう出かけていた。リビングに行くと、そこには淑恵（よしえ）もおらず、不二子（ふじこ）だけがだらりと身をソファに横たえていた。

「昨晩は激しかったみたいですわね」

皮肉っぽく不二子は言った。

「よしてくれ。それならいつもの君の方が……」

言い返す阿九斗を遮（さえぎ）って、不二子は真面目（まじめ）な目になる。

「知ってますわ。何を言い争いなんて？」

阿九斗は不二子の隣（となり）に座ると事情を話した。この時とばかり、不二子は阿九斗の身体に頭をもたれかけさせる。

「まだ世界を救うなんてことを気にしてましたの？」

「正直、そっちの意識は薄（うす）れていたけどね。けーなのことも、ころねのことも、ヒロシのことも忘れそうだったさ」

阿九斗は、不二子の髪（かみ）に自分の指を通す。慣れた仕草で不二子は頭の位置を変え、阿九斗の手に甘（あま）えてみせる。

「これだけ幸せなら、ね」

「実際、記憶すら薄れている。僕らが永遠の中に留まり続けるように」
「永遠はお嫌かしら？」
「そうなんだと思う。永遠の中にいる僕らは、永遠である意味を見つけ、終わりを……終わる」
「ちょっとわかりにくいけれど、そういうことなのね。さて、それじゃあ始めてもいいんじゃなくって？」
「何を？」
「まず、ここが夢か現実かを考えるために、お互いに触れ合うとかどうかしら？」
　不二子の手が、阿九斗の腰に回される。
「そういう行為が僕らの記憶を薄れさせている……のかもね」
　阿九斗は立ち上がり、家を出ようと促した。
　疑問に思いながらも不二子がついていくと、阿九斗はマンションの屋上に上がった。ここからは街が一望できる。
「街を見ることに意味が？」
　不二子が聞くと、阿九斗は首を横に。
「いいや。でも、遠くは見たかったんだ。限界まで遠く、ね」
　阿九斗は言うと、マナスクリーンを出した。そこには、阿九斗の視界がそのまま映し出されていた。
「さすが、魔術は衰えていませんわね」
「腑抜けたりはしたくないな。ともかく僕の視界はマナが有る限りは無限大だ」

「しかし、生きていた時は、帝国領土にしかマナはありませんでしたし、そもそも地球は丸かったから、地上では望遠鏡、宇宙を見れば普通の人間と同じ……でしたわね」
　不二子の説明に阿九斗はうなずき、遠くを指さした。
「しかし、こちらの世界はマナに満ちている。どこまでも、ね」
　阿九斗は視界を遠くへ伸ばす。カメラ的に言えば、ズームしていく。その映像はスクリーンに映し出されて不二子にも見える。
「え？　これはなかなかすごいですわね……」
　不二子が目を見開いた。
　ズームしていく映像は、街を抜け、その先の地平線まで見通し、さらにその先へと続いている。地平線の先、つまり、空だ。
　空はスクリーン一杯に広がり、視界は青一色に。やがてそれは雲を抜けたために、一瞬だけ白くなり、ぐいぐいとその暗さを増していく。視界は宇宙へ抜け、やがて、消えた。
「消えた？」
　不二子がそうつぶやいた次の瞬間、視界は再び闇に。そして、今度は先ほどまでとは逆の光景が映し出される。地球が拡大され、やがて視界は青く。そして……。
「わたくしたちの背中……！」

その言葉通り、スクリーンには阿九斗と不二子の背中が映し出されていた。それが阿九斗の視界とイコールだということは……。

「これ、今のわたくしたちですの？」

不二子は右手を振ってみた。同じように映像の中の不二子の腕も動く。

「うん。今、の僕の視界なんだ。少し前から気づいてはいたんだ」

阿九斗は左腕を動かした。

「これがどういう意味を持っている、と？」

「生きている時にいた世界が虚構のものなら、死後の世界も同様に虚構。それなら、その違いは何か？　って考えた。そして出た結論が、外側との壁があるかどうか、なんだ」

「生きている時の世界が、外側との壁がある世界。そして、ここは壁がない。三次元上下左右どこに向かっても元のところに戻ってくる空間になっている。どこまでも行けるけど、有限、という具合」

阿九斗は説明した。

「理屈はわかりますわ。しかし、それがどういう意味を持っているのか……」

不二子の質問に、阿九斗は「わからない」と首を振った。

「それでも、確証はないまま言えることは、虚構にしても、外部を持つ虚構と内部しかない虚構があるってことさ。そして内部しかない虚構は……誰かを主人公にし、誰かを背景にしている。僕らのすることは上手くいくだろうさ。ここではね」

いたずらっぽく不二子に流し目を送った。
　不二子は顔を赤くして、口の端で小さく苦笑した。
「気づいていましたのね。わたくしがまだ世界制覇なんてことを考えてたこと」
「他の誰かが思ってるより、僕ら良いコンビには違いないからね。何をしているかくらい、他の二人が気づかなくてもわかるさ。そして、僕を中心とした政治構造を構築するのに後一歩まで近づいているんじゃないかい？」
「その通りですわ。で、どういたします？　玉座に座るか、単なる富豪の暮らしで終わるか。思うままですわよ」
「そして、君は僕がどうともしないのを知っている。ちょいと手の込んだ悪戯だろ。蕩尽されることを目的に積み重ねられた財宝は、派手に損壊されるほど楽しいってね」
　阿九斗は笑った。
「あら、全部わかってもらえてるの嬉しいけれど、先が読まれているの悔しい」
　不二子も笑う。
「じゃあ、僕はさらにその先に行こう。この世界をひょいと握りつぶして見せようか」
「え？」
　阿九斗が、あまりに平然とそう口にしたので、不二子は戸惑った。
「ここは有限世界で、内部にはマナが満ちている。そういうルールなんだ。つまり……」

阿九斗が前に軽く手を伸ばした。握力(あくりょく)を鍛(きた)えるかのごとく指を折り曲げていく。

世界が軋(きし)み始めた。

「ああっ……」

不二子が驚きの声をあげた。

街並が揺(ゆ)れている。空気が振動(しんどう)し、その圧力でビリビリとうなりを上げているのだ。

同様に大地も揺れていた。大地はマナを含(ふく)まないはずだが、この有限の空間すべてにマナが満ちているということは、大地そのものがマナでできていることと同義である。

空間そのものが阿九斗の手の中にあるようなものだった。

世界そのものが小さく押(お)しつぶされようとしているのだ、と不二子は気づいた。

「阿九斗様……」

不二子は恐怖から、小さく名を呼ぶ。

これは自死に他ならない。

死なない、死ねない空間で、空間そのものを潰(つぶ)したら、すべては無に帰すのか？　阿九斗の表情は、そんな素朴(そぼく)な疑問を実行しようとしているようにも、すでに覚悟(かくご)を決めているようにも見えた。

ただ静かに手を握り締(し)めていくその顔は穏(おだ)やかだった。

それを見て、不二子はただ阿九斗の空いている手を取った。

大地そのものが空間の中央に収束するかのようにめくれあがる。海が津波の如く荒れ狂って街に迫り、ビルが砕け、人々が空間の中央へと浮かび上がり始めた。

地球という球体を深海に沈めたかのように、全体から圧力を受けている。

誰もが見たことのないような世界の終わりがそこにあった。

不二子が阿九斗にしがみつき、阿九斗が不二子の肩を抱き寄せたそのとき、不意にマナスクリーンに雑音が混じった。

ザ、というノイズ。

その後に続いてきた言葉は……。

「駄目ネ！　そんな終わりじゃ認めないヨ！」

奇妙な訛りの言葉。聞き覚えのある声。

ふと、放置していたマナスクリーンに目をやる。

そこにいたのは、金髪のけーな。

「ケーナ」

阿九斗がつぶやく。



それは、以前、けーな＝自同律が世界にリセットをかけたとき、歪み（ゆが）として出現してしまったもう一人のけーなだ。

阿九斗たちはそれをケーナと呼び、その存在を消すために奔走（ほんそう）したことがあった。本来はいてはならないはずの彼女を。

「どうして？」

この予想外の出来事に阿九斗は手を止めた。

「こんな風には終わらせないネ！」

ケーナは繰（く）り返（かえ）した。

「アタシが消えたのは満足したからだヨ！　アナタたちはホントに満足はしていないネ！」

阿九斗は動きを止めた。ケーナに答えようとした。

しかし、その時にはマナスクリーンが消えていた。

「幻覚（げんかく）……？　いいえ、そんな馬鹿（ばか）な」

不二子はそう口に出し、阿九斗の反応を見て、それが幻覚でないことを確認した。

阿九斗は手を緩（ゆる）めた。

世界は縮小をやめ、ゆるゆると元に戻り始めた。そのスペクタクルともいえる光景は、しかし、人々には一切認識（いっさいにんしき）されていないようだった。まるで、先ほどの破滅（はめつ）寸前の光景が嘘だったかのように、人々は街を歩いている。

「ホントに満足はしていない……ですって？」
　不二子は、阿九斗を見た。
　阿九斗は、不二子を見返し、目を伏せた。
「どうもそうらしい」
「最初からわかっていたことですけれど。でも、わたくしたち、もしかしたら本当に阿九斗様が満足してくれているんじゃないかって思ってましたのよ」
　不二子は阿九斗にキスをし、阿九斗より先に屋上から階下への扉をくぐっていった。
　しばらく空を眺めてから、阿九斗が階下への扉へ向かうと、すれ違いに淑恵が上がってきて、阿九斗に残念そうな目を向けた。
「私だって女の子だ。そりゃあ、悔しいよ。歪みを感知して来てみれば、こんなことになっていて」
「ごめん」
「謝られても、なんというか困る。でも、私に考えて欲しいことがあるんだろう？」
　淑恵が「仕方ない」と肩をすくめた。
「ああ。どうやってここから出るのか考えて欲しい」
　阿九斗は真っ直ぐな目で言った。
「長くなるね。私の部屋で話をしよう」
　淑恵は阿九斗に部屋に戻るように促した。

○

ブレイブはうちひしがれていた。

二十五回までは数えた。

阿九斗を殺した回数である。しかし、何も変わらなかった。何も。

望一郎は、途中から憐憫を隠さぬようになった。自分と同じことをした者への共感もそこにははっきりと感じられた。

「もうよした方がいい。わかっただろう」

「歴史変更を許さない何者かの悪意については、わかりすぎるほどわかったよ」

ブレイブは自棄になったように言った。

「そういうことだ。何故か流れの変更を許さない」

「しかし、俺だって歴史を進めてきた一人じゃないか」

「ああ。変更しようとして無駄なあがきをするということも歴史に含まれている、という感じだろうね」

望一郎はため息をついた。

「死んでからわかった。私は死ぬことが決定されていたように思う」

「じゃあ、俺も同じように苦しみ続けるってことか？　あんたのように。俺の意志がある限り何度も？報われない殺人を何度も？　しかもそれが無為に？」

　自分でもわかっていることを再確認するように聞く。

　その通り、と望一郎はうなずく。

「それが役割に違いない」

「役割？　じゃあ、誰かの筋書きで俺は動かざるを得ない？　何のために？」

「この世では、いや、言い方が悪いな。どの世界だろうと、誰にも自由意志はないに違いない。君だって、自分が満足する結果を得たいからこそ今の行動があるんだろうが、それは〝物語〟というラインに沿って思考している。幸福？　満腹で、異性が隣にいればそれで、その瞬間は満足だろう。その異性が死んでも、喪失感が長く続くはずもない。別の者で充填できぬ隙間などあるものか。腹を満たすのに美食を探す者も、空腹になれば手近で済ませる。生物的な満足と幸福との間に開きはないはずだ。〝物語〟さえなければね。愛、血筋、成功、人生観、すべて宗教的なそれが規定する価値観で、生物的には価値を置くべきものではない。物語が人間の知性を支えているが、侵食してもいるんだ。ウィルスのように」

「だが、俺たちは抵抗できたぜ？　そのことに気づいて、すでに自然な物語を崩壊させようとしている。この場所に至る歴史が不自然なものだって知っている。人為的な物語だと登場人物が理解してしまったことは、物語を不安定にしている！」

　ブレイブは新しい発見に目を輝かせた。

しかし、望一郎の表情は変わらない。
「そういう物語だったんだ」
「そういう？」
「物語がなんであるかを暴く物語だったんだよ。都合良く出現する機械仕掛けの神はカタルシスのためにいるんじゃない。今、我々が何を物語として認識しているかを伝えるためだけに、物語を虚構だと信じさせるために出現する。その神が伝えるのは物語の快楽と限界だ。そして、私たちは機械仕掛けの神になってしまった。我ら自身が」
望一郎が自分を、次いでブレイブを指さした。
「俺たちがデウス・エクス・マキナ？」
「歴史改編は、どんな難題も救える。非業の死も、とんでもない失敗も」
「つまり……デウス・エクス・マキナが禁止されたわけじゃない。だが、それが失敗する？」
「ああ。それから導かれる答えはひとつだ」
「わかったよ。俺たちは主役じゃない」
ブレイブは放心していた。
「そうだ」
望一郎はつまらなそうに地面をつま先でえぐった。

「しかも、まだ役割が終わったわけじゃない。なぜなら、君の名前はもうブレイブでしかなく、まだブレイブの称号を失っていない。許されることといえば、すべて失った後に示す勇気だけが君の価値なんだろうさ」
「それでも脇役なんだな。じゃあ、主役は？」
　本当は答えを知っているのに、ブレイブは質問した。
「それはもちろん、物語が何重にも虚構だと暴いた男が、物語についての物語を終えるのがラストだろうね。魔王が世界を滅ぼすのだろう？　王子様とお姫様は結婚し、その後幸せに過ごしました……ってのを許さない物語の結末は、すべて世界の終わりの話さ」

○

「つまり、僕が重要だってことなのかい？」
　阿九斗は言った。
　まだ信じられずにいた。
「そう思っているよ」
　淑恵は真剣な表情で言った。
「君が世界を終わらせるんだ。そういうことなんだ。それが具体的にどういう意味を持っているかは複雑な話になる」

「ともあれ、決着は僕がつけなきゃならないってこと？」
　阿九斗が聞くと、淑恵はうなずいた。
「ケーナは満足して消えた。君も満足しなくちゃいけない」
「そういうことならわかる。だけど、僕の満足って……」
「君は虚構内にありながら虚構を嫌(きら)っていた。虚構を暴きたがる性癖(せいへき)を持っていたがために、次々と先を暴いてしまった。閉鎖(へいさ)システムを破壊したはずが、その先にあるシステムを起動させてしまった。虚構の多重構造。無限の後退。それはどこまでも続いている地獄(じごく)なんだ。難しいね」
　淑恵は椅子(いす)に座らせた阿九斗の背中にしなだれかかっていた。
「ところでさ？」
「何？　重要な話をしているのに」
「重要な話だからこそ聞いてるのさ。どうして、僕の背中に抱きついて？」
「脇役というか、三人の女神(めがみ)を演じたご褒美(ほうび)としての役得を味わっているところ」
「色気の無い話をしてるってのに」
「女の子を撫(な)でながら、普通の会話をするのって悪役っぽくてよくない？」
「まだ悪役なのかい？」
　淑恵は阿九斗に頬(ほお)をくすぐられて喜ぶ。
「ふふ……これからの役割が悪役でなくて、何なのさ？」

「だから、何をするってのさ？　僕の満足？」

「この世界を終わらせる……でも、それは複雑な話になる。具体的には、この世界が何かって事を説明しないといけなくなるよね」

　淑恵は解説をはじめる。

「死後の世界は私たちのためにあつらえたように、私たちの意識で、いや、ほとんどは君の意志で変化する。ということは、この世界はどんな様相をとることも可能なんだ」

「そこまでは理解しているよ」

「いや、どんな様相もとることができるってことを本当には理解していないよ。可能世界という概念がある」

「可能世界？」

　阿九斗は脳内をスキャンしてデータを取り出すかのように、かつては知らなかった言葉を〝思い出す〟。

「なるほど。どんなことでも起こりうる世界が想定されるとすれば、そこでは論理的に考えられることはすべて起こるだろう、という思考実験か」

「そう。つまり、文章で記述できることはすべて起こりうる。逆に言えば、この世界の限界は言語で記述できないことは起こらないということにある」

　それから、淑恵はデータベースからはわかりにくい〝可能世界〟という概念について説明をはじめた。

　例えば、「象が空を飛ぶ」「ヒトラーは西暦二〇〇〇年に巴里を訪問した」というようなふたつの文章は、現実には有り得ないが、文法としては成り立つ。もし、象が飛行生物であったなら、もしヒトラーが死ななかったなら、現実としても成り立つ。それらをあり得たかも知れない世界として肯定していく。すると、世界には無限ともいえる可能性が含まれていることがわかる。それらは並行世界として無限に存在していると考えてもよい。

「論理的にあり得る世界をすべて君が作り出すんだ」

　淑恵が命令するかのように言った。

「すべて、か」

　気が遠くなる、とでもいうように阿九斗は言った。

「その先に残ったものが、君の意志だろうね。すべての世界を見てきて、君が選び取るんだ」

「確かに、僕がどうとでもできるこの世界……　そこで世界を救う可能性ってものを探す。そうでなければ、ここを出られないのかもしれないな」

「そうなれば、すぐに開始すべきだと思うな」

　淑恵はマナスクリーンを出し、これまでの歴史をモデルとして表示した。

「君の参照できるデータは、滅びる直前の世界のコピーだが、それがある限り、逆算してあらゆる可能性を構築することができる、とも言える」

「しかし、それって再現された世界がいい加減なものになるような気がするな」

阿九斗は言った。
「それでいいのさ。いい加減なものだったとしても、それも可能性のひとつさ」
淑恵は言った。
そして、阿九斗は自らの手の中から可能性を紡(つむ)ぎ出すことを決意した。

○

世界がうなりを上げた。
そのことに気づいていたのは一部の者だったが、もちろんブレイブと望一郎が例外であろうはずがなかった。
「これは……？」
ブレイブが聞いた。
質問しながらも、世界そのものが形を失っていくのだと、直感できた。
「世界が改変される瞬間だ。君が時間を遡(さかのぼ)る時、この小規模なものが感じられた。当事者は気づかないことだが」
望一郎は言った。
「すると、改変したのは……」

「言うまでも無い。魔王さ。スーツを起動してくれ。ここから抜けるぞ」
「抜ける？」
　ブレイブは聞き返しながらも、スーツの時間跳躍機能を起動させた。望一郎も巻き込んでの時間跳躍を行えるように範囲を調節する。
「我々をこの空間から消す。この瞬間、魔王が死後の世界を自由にしているが、我々はその要素とならぬようにする」
「話は後で聞こう」
　ブレイブは行ったことの無い時代に跳躍した。人目を避けられる場所といえば、魔術文明はおろか、人の手による電波すら飛んでいない時代の高山山頂だ。
「寒いのは嫌だろうから、夏の二千メートル程度の岩山にしておいた」
　その言葉通り、見渡す限り岩山と、下方に森があるだけの空間だ。ここより高い山の山頂には雪も見られるが、日当たりの良いこの場所は暑いくらいだ。
「助かる。死後の世界より気候は良いかもしれない。ひんやりした風というのはいいものだね」
　望一郎は手近な岩に腰掛けた。
「で、魔王があの世を改変したって？」
　ブレイブは腰に手を当てて聞いた。
「改変はいつものことだが、今回は全面的に消した」

「消した？　リセットしてやり直したということか」
「そうだ。死後の世界とは魔王の自由にできる世界だったということだな。彼も周囲の知恵(ちえ)を借りてそのことに気づいたのだろう」
　望一郎は多少困惑(こんわく)した様子で言った。
「自由に？　あそこでは誰もの願いが叶(かな)うんじゃなかったのか？　魔王の意志が強かっただけで」
　ブレイブがいぶかしむ。魔王が存在する前から死者があそこにいたはずだ。
「いや。その死者たちの記憶すら魔王がその世界に行ってからのものだった可能性がある。自覚は絶対にできないが」
　望一郎の説明にブレイブはうなずくが、表情は変わらない。
「世界が五分前に記憶ごと作られたとしても、誰も認識できないって理屈(りくつ)だな。知ってる。しかし、それが本当になる……いや、なったとして、俺たちは何なんだ？」
「当然の疑問だ。だが、それに回答するのは難しい。我々はやはり内側にいるわけだからな。それでも思考すれば、宇宙全体が自同律の作ったものだとするなら、我々は魔王を含めて虚構の存在だ」
　望一郎が言葉を選び始めた。
「それはさっきの話だな」
「死後の世界はその内側になる。しかも、魔王の内側だと考えるわけだ」
　ブレイブは「ああ」とうなずく。

「そうか。全員、死んで再生された……ただし魔王の手で」
「そういう理解になる。世界そのものをデータとして再構築した。かつてコンピュータとしての神がしようとしたように」
「じゃあ、それをなんで消してやり直そうとした？　神に等しい存在なのに、自分の作った世界に納得（なっとく）していないってどういうことだ？」
「それは彼の言葉から推測できる。そこが永劫（えいごう）に続く終わりの世界だったからさ」
　望一郎は「自分にはわかる」というようにうなずいた。
「俺にはよくわからない」
　ブレイブはずっとしかめっ面（つら）だ。
「彼が自分の欲求を満たすことに物語はない、と気づいたんだ」
「そんなこと、俺の方が先に気づいていた。でなければ、この世界で彼女（かのじょ）と暮らしたさ」
「私たちはそうできない。そういう存在なんだ」
　望一郎が言うと、ブレイブはここでようやく表情を変えた。
「存在？　その説明のはずだったな」
「死後の世界の人々が虚構のキャラクターだったなら、我々だけが実在なんだ。魔王と我々だけが」
「魔王と、俺たちだけ？」
　ブレイブはきょとんとする。

「自同律に選ばれたのかもしれない。もちろん、それは脇役としてだが、重要な役には違(ちが)いない」
　不思議と穏やかな表情で望一郎は言った。
「そりゃあ、運命、みたいなものは感じもする。今回のことにも巻き込まれなかったわけだしな」
「魔王は物語そのものをやり直し、それについて考察していくのだろう。死後の世界に行った人々、キャラクターを使って」
　望一郎は断じた。
　ブレイブもそれに納得した。
「だが、それが出来るはずも無い」
「そうだ。成功しなかったことは、二度目だろうと他者の力が働かなければ絶対に成功は無い」
「それを俺たちがやるって?」
　どこかあきれたようにブレイブが言った。
　望一郎はうなずいた。
「すでに気持ちは決まってるだろう?　世界を救うのは、勇者と決まってるんだ」
「どうやって?」
「方法はあるさ。私たちも魔王の世界に入る。いや、入りはするが、巻き込まれずに介入(かいにゅう)する。我々は自同律が作った歴史の線上を動くことができる。もちろん犠牲(ぎせい)はあるが」
「犠牲?」

「魔王の世界に介入するのは、我々だ。個々の人格ではない」

　望一郎が何かを決意したように言った。

　ブレイブはこれに不穏なものを感じる。

「どういう意味だ？　犠牲って……」

「自同律もそうだが、魔王も人々を一人格として扱っているわけではない。それぞれに内面はあるが……物語の前では、その他の雑踏はすべて人格の不要な集合体にすぎない。再編成でもそれはそうなるさ」

「なるほどね……」

　ブレイブは納得して、深くため息をついた。

「俺たちは、勇者という役割に統合された人格として扱われるわけだ」

「そうだ。おそらくは自同律の都合で。そういうものなのさ、キャラクターは」

「俺はそうはなりたくない」

　ブレイブは言った。

　しかし、目の前から望一郎は消えていた。

　流れ込んでくる記憶と、意識と、知識とを吟味するように目を閉じた。

　そのまま静かに呼吸を続け、やがて空を見上げた。

「わかるよ。自同律に何かを見せなきゃいけないんだろ、俺たち」

## 4　無数の宇宙

可能性をすべて開いてしまったことが、間違（まちが）いだったのかもしれない。

空間こそ有限であり、キャラクターこそ有限ではあるが、その組み合わせは無限となる。可能性を開く、ということは、概念としてだけでなく、実際に阿九斗（あくと）の内にあったはずの世界の壁すら解放してしまったことを指す。

阿九斗の中にさらなる宇宙が誕生したことに等しい。

もちろん、その道具立ては阿九斗の内面に留まらなかった。

つまり、外宇宙の神々のことだ。

それすら物語の可能性となった。

結果として、すべての物語は混乱した。

物語の混乱とは、いかなる状況（じょうきょう）を言うのか？

その答えは、やはり昔からあるとある物語の中に含まれていた。

『バベルの塔（とう）』である。

それまでは「我々は物語を共有していた」と言える。彼（かれ）らは役割を演じていたようなものだ。だからこそ、世界は阿九斗以外の物語への介入を許さなかったのだ。

では、人々が物語を共有しなくなったなら？

答えは混乱である。

外宇宙の神々とは、それぞれ独自の物語を内包した、いわばそれぞれが主人公であった。複数の主人公が、同じ空間でそれぞれ物語を進めようと試みたのだ。

それは、騒乱（そうらん）ではあったかもしれないが、争いではなかった。主導権を奪（うば）おうとする〝強い〟物語だけでなく、〝弱い〟物語さえもそこには含まれていたからだ。

やっかいなことに物語の強弱は、大きさとは別種のものであった。弱く、大きいものは日常を駆動（くどう）させた。強く、小さいものは異常を駆動させた。

世界の成り立ちを説明し、人々の同一性を意識させる概念ともいえるものは大きいが、日常の中に溶（と）けて気づかれぬこともあった。個々の生の物語は強く心に刻まれたが、それは当然ながら個々人のものに留（とど）まった。

個人。

ここにあって、人類ははじめて〝個〟となった。言葉は通じても、物語を共有していない以上は、そこに関係性は産まれなかった。友人、敵はおろか、他人という関係性さえも成立しない。

可能性を無限にしたなら、即座（そくざ）に物語は不能となった。

無数の孤独（こどく）。

一人称（いちにんしょう）。

それでも物語、いや、それ以前のものをはじめる。

暗闇（くらやみ）に寝（ね）ている。いや、転がっている。投げ出されている。何もしていない。

声が聞こえる。

遠い。いや、近い。わからない。

声は誰（だれ）に呼びかけているのか？　自分にか？　それとも別の誰かが？

確かめる術はない。声は自分が発しているのかもしれない。

声が続く限り、時間が存在していると確認できるかもしれない。だが、そこに単位はない。永続している。同じ言葉が繰り返されていない保証はない。永遠に鳴る鐘（かね）の回数を数えても、唯一（ゆいいつ）一点の鐘の音だけを指し示す言葉はない。何回目の？　どの区切りの？　どの永遠の？

声を自分のものと仮定する。

まだ物語にはならない。孤独すらそこにはない。なぜなら一人称であるからだ。
発話する。
音。
発話するために言う。
言う。
言語。
正解は見出(みいだ)せない。
意味は無い。
間違えさえもない。
無意味。言(い)い間違え。失敗。すべて、無い。

身体を動かす。
動く。
外と内。辛(かろ)うじて分かれている。
動く。
どちらへ？　空間は外なのか、内なのか？　内へ向かえば何も無く、外へ向かえば何も無い。分割(ぶんかつ)。永遠に鳴る鐘の回数を数えても、唯一一点の鐘の音だけを指し示す言葉はない。何回目の？　どの区切り

の？　どの永遠の？
それでも数える。
分割する。
分割を増やしていく。
空と地を分かつ。
動く。
動ける。
地を動ける。

立つ。骨をもって。背筋を内にもって。
痛む。総(すべ)てでは無い。内側が。外側に痛みは無い。

吠(ほ)える。

無意味。言い間違え。失敗。それしか、無い。
言い間違えだけが声にある。過(あやま)ちだけが内側にある。痛みだけがそこにある。
そこに無い。断言できない。間違えしか無い。
間違える。

よりよく間違える。
なんとかして間違える。
強い意志をもって間違える。
何度でも繰り返して間違える。

その先に。

何も無い。

見る。
見間違（みまちが）える。
よりよく見間違える。
なんとかして見間違える。
強い意志をもって見間違える。
何度でも繰り返して見間違える。

そこに間違えがあった。

見える。
お前が。
二人称（ににんしょう）。

光の中に立（た）っている。いや、立ち尽（つ）くしている。そこにいる。何もしていない。
声が聞こえる。
遠い。
呼びかけられている。自分にか？　それとも別の誰かが？

分割する。自分と他人。此方（こなた）と彼方（かなた）。
声を彼方のものと仮定する。

物語かもしれない。孤独かもしれない。自分に発せられたものでないかもしれないからだ。なぜなら二人称であるからだ。

発話する。

音。
発話するために言う。
言う。
言語。
正解は見出せない。
意味は有る。
言い間違えもある。

吠える。
意味。言い間違え。失敗。それだけが、有る。
言い間違えだけが声にある。過ちがどこにでもある。痛みがそこにある。
間違えしか無い。
間違える。
よりよく間違える。
なんとかして間違える。
強い意志をもって間違える。
何度でも繰（く）り返（かえ）して間違える。

その先に。

物語がある。

こうして、現実は現実となった。現実を認識するのに物語が必要であり、ここに他者との関係性が生まれたからだ。

しかし、そこから物語の可能性を阿九斗が再構築していくのには無限に等しい年月が必要だった。当然ながら、あらゆる物語を試(ため)さなければならなかったからだ。

それでも物語は即座に複雑化した。近代を境に物語は爆発的(ばくはつてき)に増えた。機械と都市そのものが物語の要素となったからだ。

ただ、この作業においてやっかいだったのは、外宇宙の神々が持ち込んできた要素だった。それまで自同律が持っていなかったものがそこにはあった。

何度か阿九斗は外宇宙の神々と争(あらそ)ってみた。

あるときは阿九斗が勝った。

何処ともしれぬ異界の学園で、不二子の尻に敷かれた阿九斗が、彼女の世界征服のために奮闘するというストーリーが産まれた。それは不二子の世界征服がいつまでも終わらず、不二子と阿九斗はキスすらしないという結末を持っていた。その可能性のテストは終わった。

あるときは外宇宙の神々が勝った。

一九四五年。二月十三日。ドレスデン。そこに阿九斗はいた。連合国軍によるまったく無意味な爆撃が行われ、絢子とともに火炎旋風に巻き込まれた。阿九斗は重傷を負ったものの死なず、目の前で絢子の死を見ているしかなかった。阿九斗は、その後、傷痍軍人として街に立ち、人々から金をもらって暮らしたが、栄養不良のため死を迎えた。その可能性はそこで潰えた。

阿九斗は生まれつき幽霊が見える不思議な力の持ち主だった。彼はその力を使って、幽霊のころねとともに、複雑な人間模様のからんだ事件を解決していくのだ。その物語には結末は設けられなかった。数万パターンのストーリーが検証され、どれもやり尽くされた後、その可能性のテストは終わった。

一九五〇年七月。韓国。旧日本軍のコバルト鉱山において、近隣から集められた保導連盟所属者が殺された。共産主義者とみなされたからである。しかし、連盟は共産主義者を再教育するために設立されたものだった。しかも、転向者を増やすため、名乗り出た者に職業などを斡旋する制度を定めた結果、大半は共産主義など知らぬ村人たちとなっていたのだ。そこには北朝鮮に協力する共産主義者などほぼいなかったことになる。コバルト鉱山が場所に選ばれたのは、死体を埋めるためであった。阿九斗はそこで殺害された。彼は転向者であった。彼が死の直前に驚愕したのは、殺害に荷担した韓国警察は、共産主義とは何かを知らなかったことである。

異世界に転生してしまった淑恵は、前世で近代人だった記憶を持っていた。科学レベルが中世である異世界で、科学の力を使って大活躍をはじめる。この物語は、結末が物語にならぬことによって可能性のテストを簡単に終えることとなった。ついに近代の肯定という価値に行き着くことを否定できなかったからである。

家出少女である絢子は、不良であったがために家族から捜索願を出されることはなかった。しかし、夜道を独りで歩いているところを、複数の与太者が乗るバンに拉致されていた。彼らは絢子から事情を聞き出すと、消息を探す者が無いことを幸い、薬物を打って強姦、後に山中に彼女を放置した。薬物の量が不

適当だったためか、下山までに体力が尽きたためか、絢子は山中で死んだ。遺体は後に発見されたが、犯人はついに捕まらなかった。

平凡な少年、阿九斗のもとに、ニンジャがやってきた。彼女、絢子は、美少女でありながら、田舎育ちのために一切の常識が無く、平和な街は大騒動になっていく。この物語には幾万もの展開が試されたが、それだけでは足らず、ほぼ永続するのではないかと判明した。そのことにより検証は打ち切られた。

良家の娘として産まれた不二子だが、派手好きな両親は不二子を疎んだ。それでいて、十分な資産がありながら、育児は自分たちで行うという奇妙な信念を彼らは持っていた。当然のように物心つかぬうちから不二子への虐待は行われた。両親以外に頼る者が無く、神の概念すら知らぬ彼女は、自らを傷つける両親を慕い続け、両親はその事実にむしろ恐怖した。決定的な殺害は、父によって行われた。足を持って振り回され、壁にたたきつけられた不二子は頭蓋を割られ、絶命した。昔なじみの医師は、金をもらってこれを隠蔽した。両親は、一年後には娘のことを忘れていた。

阿九斗は、女性だけにしか発現しない超能力に目覚め、女子校である超能力訓練校に、唯一男性として入学することになる……。

そこで阿九斗は物語生成を中断した。

すべてが無意味に思えてきた。

物語群は発達しているが、自身が作るものは畢竟（ひっきょう）、馬鹿馬鹿（ばかばか）しく、心地（ここち）よさが永続する世界への憬（あこが）れだけが突出したものとなった。

おそらくは、それこそがある種、物語の最終形態といえなくもなかった。物資が乏（とぼ）しい時代に焦点（しょうてん）を当てれば、腹一杯（はらいっぱい）に食事をするというだけの物語すら成立したのだ。いつの時代でも幸福な他者との交流が望まれるのは間違いない。

一方で、外宇宙の神々の干渉（かんしょう）によって作られた物語は、願望の破壊（はかい）を意図したものだった。しかも物語としての外面を隠蔽し、それこそがまるで真理で有るかのように見せつけてくる。これも物語としては終局の姿だろう。

ここまでに数千年をすでに要していたが、なおも物語は人間に姿を隠（かく）しているのではないか？　との思いは、疑い以上のものとなった。

物語をフラットにするべく、阿九斗は永遠に続く平面に椅子とテーブル、そして飲み物といくつかの果実を用意した。この程度でも物語は発生しているが、最低限にはとどめられるだろう。

人は物語としてしか現実を認識(にんしき)できない。そして、自分は物語の終わりを探している。それは現実の終わりを意味していた。この時の流れを止めるということでもある。

物語は確実に抵抗(ていこう)をはじめていた。人類が滅びても、物語だけは生き残ろうとしているかのように。

永遠に続く平面。その空間に阿九斗は客を呼んだ。阿九斗の影響(えいきょう)を受けぬ人格はいまや数少ない。アドバイスをもらえる相手は一人しかいなかった。

ヒロシが照れくさそうな笑顔(えがお)でそこにいた。

「こういう風に話すのって、はじめてじゃないですかね？」

ヒロシは言った。ブレイブスーツは着ていないが、彼は今も確かにブレイブだった。

「実際、僕(ぼく)ら、ずいぶん離(はな)れていたしね」

「アニキと対等に話すなんて、あまり考えていなかったな」

「そうかもしれない。でも、互(たが)いにこの時が来るのに気づいていた気はしている」

「俺(おれ)も呼ばれたから来たってわけじゃないですよ。この時空を選んで転移してきたんだから。この時が来るのはわかってました。だから、俺は数ヶ月。アニキは数千年？　それでも久しぶりは久しぶり」

「こんな場所で悪かったね」

阿九斗は、笑いながら飲み物を差し出した。

「こんな場所……永遠に続く平原、というか、砂漠（さばく）というか」
　ヒロシは周囲を見回した。
「もちろん、どんな姿にもできるけれど、できる限り物語を発生させたくないんだ」
「やっぱりここはアニキの世界なんだ」
「そういうことになるね。飲み物、何がいい？　まだ決めていないんだ」
　阿九斗はこともなげに言うが、ヒロシがのぞき込んだカップの中は、まだ何物にもなっていない液体としか形容のしようがないものが注がれていた。
「水で。天然炭酸の」
　ヒロシが言うと、カップの中身は泡（あわ）の浮（う）いた冷たいミネラルウォーターに変化した。
「なるほどね」
　納得してヒロシは水を飲んだ。それはさわやかに喉（のど）を潤（うるお）した。
「何でも出来るって、どんな感じなんです？」
　一息ついて、ヒロシが聞いた。
「生物としての快楽が終着した場所にいる感覚だよ」
　阿九斗の即答（そくとう）に、ヒロシは少し笑った。
「それは感じたことがないや」
「だろう？」

阿九斗も微笑(ほほえ)む。
「でも、僕ら、同じステージにいるんだ。たぶん、概念(がいねん)となっていないのは僕らだけだ」
「概念？」
「人格って、他人から見たらわからないものだって、こうなったら実感できるよ。他人の反応が、もし機械的なものだったとして、僕らはそれを見分けることができない。僕の中に今、存在している無数の人格とはそういうものなのかもしれないんだ」
「個人しか覗(のぞ)けない箱に、同じ名前がつけられた別の物体が入っている時でも、会話が成立するのか？　内容を知らない外国語の辞書に挨拶(あいさつ)の応対表が載(の)っていて、それで筆談をした場合、会話と言えるのか？」
ヒロシが言った。
阿九斗が、面白(おもしろ)そうな顔になる。
「うん。確かにそういう言葉を返すのは君とは思えないな」
「俺はここにいる時は、ブレイブという概念を統合してもいるわけです」
ヒロシもにやりとした。
「そうか。やっぱり概念は概念か」
「とはいえ、アニキの言いたいこともわかります。自同律の世界で受肉しているのは、俺とアニキだけだ。創造主の前で平等に概念であることを受肉と呼ぶことでいいんじゃないですか？　だから、アニキの世界で

は、その内部の人々はやはり平等に受肉している」

「創造主とはいうけど、神という感覚はやっぱりないな。実感するんだ。物語こそが僕らを縛っていると。世界創造に挑んでも、どんな物語を選択するか、程度しか自由度はないんだ。結局のところ、僕はそれを殺して、この世界から抜け出したいってわけだ」

　阿九斗が寂しそうに言った。

「物語を殺すことが、アニキの最終目的だと再確認したわけですね」

　自分にあきれたように阿九斗は言った。

「そういうことらしい。決意したときは気楽に考えていたんだけど。神を殺すって決意した時からね」

　ヒロシは苦笑した。

「それにつきあわされた身にもなってくださいよ。その後に生成された物語も含めれば、俺たちが何度普通の人生を生き、何度波乱の人生を歩んだか。それに、けーなちゃんところねちゃんはまだ寝たままだ。数千年くらい耐えられると思いますけどね」

　内容と裏腹に、さして非難するでもない口調だった。

「だからこそ相談しようと思った。僕の物語の外にいるのは君だけだ」

　阿九斗は真剣な声で言った。

「そういう弱音、嫌いじゃないです。なにしろ俺たち、バランス悪かったですからね。アニキより俺の軽かったこと」

ヒロシは茶化(ちゃか)すように言った。
互いに照れ笑いを浮かべる。
「そうだったね。君はどちらかといえば、常識的な立場だったから。普通(ふつう)の思考の人間がこんなことにかかわるなんて、向いていたとは思えない」
阿九斗の言葉に、ヒロシは自信ありげに首を振った。
「今はそうでもないですよ。だからこそ、この物語を終わらせることはできる」
その断言を信用しきれた様子は阿九斗にはなかった。
「それは、僕を殺すって決断なんだろう？」
しかし、ヒロシにはひるんだ様子はない。
「もちろんそうですよ。アニキがいなくなれば、オレが世界を巻(ま)き戻(もど)し、何パターンもある物語を再びはじめる。そこには魔王(まおう)じゃ無くなったアニキがいてもいい」
「だから無理だったじゃないか。すでに何度も僕を殺したのに？」
阿九斗が不思議そうに聞くと、ヒロシはご明察、と阿九斗を指さす。
「そこが問題なんですよ！　この世界……そう、アニキの世界においても、誰もが魔王を殺したがってる。もちろんアニキ自身も。でも、それがうまくいかないのは、やっぱりここでも自同律の力が働いているからなんです！」
その言葉で、ようやく阿九斗はぴくり、と反応した。

「そういえば、崩壊を止めたのはケーナだった」
「そう。だから、自同律を殺してから、魔王を殺すことが解決になる」
言ってから、意地悪そうな笑みをヒロシは浮かべた。
阿九斗はため息をついて、すねた顔をしてみせた。
「できないことがわかっていて言うもんじゃないな」
「今の俺は、望一郎と同一化しているようなもんですからね。知識を得たと同時に、少し嫌味にもなりますって。ずっと無価値な生を送ってきたんだ。脇役として」
ヒロシはテーブルに積んであった果物に手を伸ばした。それは、手にとってようやく桃だったことがわかった。
「そりゃあ、すまないとは思っている。でも、無価値とまでは……。いや、僕も今、自分の生を無価値だと思っているか」
阿九斗も桃を手にする。ナイフを出して切れ目を入れ、指を滑らせると、するりと皮がむけた。
「だからこそ、有効な解決策を自分で出せないのだし。結局、僕に出来ることはないのかもしれない。すべて君に壊してもらうために君を呼んだような気もする」
阿九斗は暗い顔をした。
と、ヒロシが声をあげて笑う。
「はは。意地悪はこのくらいにしておきますよ」

「意地悪？」

　阿九斗がヒロシの目を覗く。

「いいや。アニキにはまだ出来ることがあるんじゃないですかってことです。俺にはそのアイデアがあるというか」

　ヒロシは桃の果肉をナイフで切り出し、その背から直接、口に運ぶ。

「出来ること……あるかな？」

　阿九斗が問うと、即座にヒロシは答える。

「すまないと思っているってことは、少なくとも責任は感じてるってことだ。アニキの中にいる人々は駒（こま）でありながら、駒だとはアニキも思っていない」

　阿九斗は、はっ、とした。

「そうか。僕は君だけで無く、かつて人格であった幽霊たちにまで責任があるんだったね。結局のところ、僕は幽霊たちの王というわけだ」

　阿九斗は思い出したように桃をかじった。

「人類の死滅（しめつ）が起こった。そして、人々はデータとなった、とも言えるわけですから」

「でも、過去にも人の行動はデータ化されてきた」

「アニキがデータ化したということは、そこには実在としての魂（たましい）が入っているわけですよ。望一郎からの受け売りですが」

「実在としての魂？　それは、つまり自分を自分たらしめている存在、と言っていたね。ゼロに芽生えた概念だ。自同律という言葉の意味でもある」

「そうです。概念という他は無いけれど、それは、実在としてとらえないといけないんですよ。やはり自同律の影響下にあるものは、魂を持つ、と考える他ない」

「なるほど。実在ととらえれば、幽霊とデータの差異が生まれるわけだ。死霊術が不完全なものであると黒魔術師たちは言ってたものな」

「だから、アニキは幽霊を呼び出すことができる」

「幽霊……か。それができれば、僕は僕の過ちを知り、この世界のことを理解できるかもしれないってことか」

　阿九斗はかじりかけの桃を投げた。そこに、横長のテーブルが出現した。椅子は今、四つ並んでいる。

　やがて、地平線の向こうに人影が見えた。陽炎のようにゆらいでいたそれは、段々とその容貌を見分けられるまで近づいてきた。少女であった。

　予測していなかったのか、望一郎の記憶の影響か、ヒロシは驚いたように声をあげた。

「照屋栄子！」

　スタイルの良い長身に、後ろでしばった長い髪は、確かに、かつて陰謀をめぐらし、阿九斗に取引を持ちかけた照屋栄子のものであった。

「あたいの記憶はもうそりゃあひどいものさ」

栄子はすべてが昨日のことのように阿九斗に難癖をつけてきた。ヒロシを押しのけるようにして身を乗り出すと、顎を阿九斗に向かって突き出してくる。

「わかるさ。牢獄暮らしだものな。でも、思索に慣れていれば、独房ほど気楽なところもないさ。それより、座っておくれよ。僕は長く話すためにテーブルと椅子を用意したんだから」

阿九斗は静かに言った。

「はん！　嫌な男だね！　そうさせてもらうさ。あんたの心がどこかに行ってしまうほどに恨んでやるつもりなんだ」

栄子はテーブルを回り込むと、真ん中に椅子を置いて座り、長い足を見せつけるように組んだ。短いスカートからは下着が覗くが、見せつけているようでもあった。

「そりゃあ、僕は、君を好くことはできなかったさ」

阿九斗は言った。

栄子は、鼻を鳴らした。

「男女の関係は好いているかどうかでどうにもならないことだってあるんだよ。何千年生きようと坊やだね、紗伊阿九斗」

それにヒロシが混ぜっ返した。

「君だって二十歳前だろうに」

栄子は皮肉っぽい流し目をヒロシに向けた。

「年齢ですべてを語ろうとするんじゃないさ。以前はあんたが大人に見えたもんだけど」
「俺が自同律にこだわった時、君は裏切ったじゃないか」
　栄子がにやりとする。
「これはあたいを糾弾する会じゃないってね。ともかく、あたいは正しいことをしたさ」
「正しい？」
　阿九斗が眉を上げた。
「どう正しかったって？　つまり、君はコンピュータとしての神々の命令に従い、現世での地位を高めようとしたに過ぎないじゃないか」
　そう言われて栄子が気色ばむ。
「それが悪かったとは思えないさ。世界が滅びようとなんだろうと、それはあたいの世代からはもっと後の話さ。現世で楽しくやる。次世代に良い社会を残す。その崩壊がずっと後なんだったら、そうする以外に何がある？　あんたとあたい、もし改心したなら望一郎とあたい、未来へ行けたはずさ」
「君は社会を管理しようとしたじゃないか。神々のデータさえ改変し、人々を騙そうとしたんだ」
「それのどこが悪いって？　あんた傲慢だよ。あんただって、ここじゃ人々を総体として扱っているじゃないか。人民、群衆、人々、国民、モッブ、大衆、なんでもいい。それらは、少なくとも背景に沈んだ。死後の世界でわかったはずだよ。あんただって、馬鹿を管理した。宗教でも与えておけ、と思った」
　阿九斗は黙り込んだ。

「あんたと同じさ。あたいは遠い将来の真実を知らなかったかもしれないが、永劫（えいごう）の時があったなら、あんただって同じ事をしたのさ」
「確かにそうだ。同じ事だ」
　阿九斗は言葉を絞（しぼ）り出す。
「あたいはあんたと同じように宗教を信じていなかった。あんたと同様に思索しないものを見下した。それでも結局あたいと共に来なかったのは、あんたが結局のところ、終末論と世界の創造者を信じたからさ。実はあんたは何かの信者だったんだ。不合理な何かの」
　栄子は阿九斗をなじった。
　そこには阿九斗を納得（なっとく）させる言しかなく、ただ阿九斗は椅子に深くもたれるしかなかった。つまりは阿九斗も望一郎も自同律の信者なのだ。
　勝利者の笑みを栄子は浮かべた。
「死んでからこの方、あたいはこれほどすっきりしたことはないよ」
　不意にヒロシが同意の言葉を重ねる。
「普通は死者に弁明の機会はないからね。投獄（とうごく）者もまた正義ではない」
　ヒロシは口調を変え、阿九斗の小テーブルを離れると、長テーブルを回り込んだ。
「いや、魔王だから当然とは思うが、そんな赦（ゆる）し、あんたはいらないはずだ。魔王を自称（じしょう）したくはないだろうし」

いつしかヒロシの顔は望一郎のそれになっていた。
「次は私だ。今や、私の予言は明らかになった。いや、正確なデータと経験から予測していたことが正しかったただけだ。当然のことだ。君は私の忠告を無視した。今や外宇宙の神々は我々を侵食し、すべてを混沌とさせている」
「それは僕の過ちだと認めなくてはならないね」
阿九斗はうなずいた。
「自同律と契りを結ぶのは私ではなかった。だが、君でも良かった。君が契ったとて、世界は救われたはずだ。様相を変えずに別の宇宙で永続できた」
望一郎の言葉は熱を帯びた。
「とはいえ、君だってけーなに、須藤理夢にこだわったじゃないか。君が話しているのは、世界のことじゃない」
阿九斗は否定したが、すぐに望一郎は反駁した。
「エゴと実益が一致していたなら、それでいいじゃないか。君には世界を滅ぼす権利があった。あのとき、神々を殺すという解決は間違いだった」
「そうだ。僕はあのとき、考えるのを放棄した。ただ衝動的にけーなの言う〝男の子の解決〟をしただけだった。だけど、僕はそれはけーなの声に従ったつもりだった」
阿九斗の声は歯切れが悪くなり、望一郎は苦笑した。

「……君が自由に出来る空間さえ外宇宙の神に侵食された。実際の宇宙もそうなっているだろう。君が心からの満足を得て死を迎えれば、この空間は終わる。そうなれば、すべては四散する。役割を背負(せお)って転生した我らのような永劫の存在さえ消え去る」

「僕がけーなを助けることもないんだろうな」

「けーなと外宇宙の神々の重要さは今やこの世界を離れれば同程度だろうからね。自同律もそこに含まれるさ」

望一郎に言われて、阿九斗は少し考える。ふと、言った。



「外宇宙の神を呼ぶ」

それにはさすがに望一郎も驚いた顔を見せた。

「出来るのか？」

「彼(かれ)らも物語化はされているはずだ。深いところで対話できるかはわからない。彼らとは物語を共有しているわけではないし。それでも可能は可能なはず」

阿九斗が言ったその瞬間(しゅんかん)、椅子に黒い人物がいた。いや、いることが皆(みな)にはわかった。

視線をそれに向けると、それは種族すら判別のつかぬ影(かげ)でしかなかった。が、視線をそらすと、確かに誰(だれ)かがいる。視界の端(はし)にはとらえられるが、表情どころか性別までもわからない。しかし、見据(みす)えると、それは影ですらなくなった。

「我は虚空(こくう)宇宙」

黒い人物は言った。これも聴(き)こうとしなければ聞こえる不可思議な声だ。

「虚空宇宙？」

阿九斗の質問は通じたようだ。かすかな、しかし、言葉で無く音として認識すればはっきりとした返答がある。

「物語なく、物質無く、ただひとつの声だけがある宇宙。そこには、you、汝(なんじ)、vous、sue、その意味の音声だけが時折起こる」

阿九斗は、黒い人物の言葉を意味として認識し直し、その独白のような内容を記憶、さらに話を聞こうと質問を続ける。
「つまり……お前！　と？　その意味の声だけが存在だと？」
「お前！　と呼びかけられ、そこに自己同一性が生まれる。この世界に最初に入った時も、それが物語を生んだ。二人称。我は声のみ。お前！　お前！　お前！」
「だが、物語があるなら、虚空ではないはずだ」
「呼びかけられた者は、決して出会わない。何者とも。交わらずそこにあるのみ」
虚空宇宙の視覚イメージが広がる。
闇（やみ）すらない闇。
光すらない空白。
そこに何者かの声だけが反響（はんきょう）する。単音の、一声に過ぎぬ声。それが繰り返される。
声の届く先はない。別の誰かがいるはずだと考える存在だけがある。
それが単数の存在なのか、複数の存在なのかすらわからない。
ただ誰かが永遠に他者を求めるのみ。
「地獄（じごく）だ」
阿九斗はつぶやいた。
黒い人物から否定の言葉がある。

「地獄ですらない。苦しみすらない。何もない」
「虚空宇宙には存在だけはある」
　ふと、別の声が起こった。
　そちらを見ると、誰もいなかった。いや、目をそらすと赤服の者が出現した。その人物も、黒服の人物とまったく同じ特徴を持っていた。
「我は無貌宇宙」
　黒服の人物とは違う声だ。だが、やはり言葉として聞くと消え去ってしまうような声をしていた。
「……無貌の力の？」
　阿九斗は聞き返したが、そのつぶやきには赤服は答えず、さらに続けた。
「無貌宇宙では存在が解け合う。原型生物は存在のために外壁を持つが、生物同士の出会いは外壁を壊し合う。捕食だ。そこでは今度は存在が互いを指さし、叫ぶ。お前だ！」
　無貌宇宙のイメージが広がる。
　そこには複数の存在の姿があった。
　アメーバ状の生物とも、無重量下の水とも、雲とともとれる何かが、虚空で互いを探し合うようにうごめいている。
　それらは、虚空宇宙でのそれと同じ音を発していた。
《お前！》

互いを探しているかのようなその存在たちは、偶然によって接することがある。

その瞬間。

《お前だ！》

それは同音でありながら歓喜の声のようだった。

「虚空とは、違う意味の、お前だ？　それは、発見の〝お前だ！〟なんだな」

阿九斗はつぶやく。

それは肯定された。

「捕食する。その瞬間にのみ他者に気づくのだ。お前だ！　やっと見つけた、と」

そう赤服が答えたとき、イメージは変化した。

ふたつの存在は、ぶつかった瞬間に交わり、ひとつになってしまった。

そこに別の音声が生まれた。

「だが、次の瞬間には、どちらがどちらともわからぬ。ただ、存在はひとつであるはずだが、内部に声が満ちてくる。誰だ！　誰だ！　誰だ！　無貌宇宙には、一瞬だけお前だ！　と叫び、誰だ！　と永遠に続く不快の声にさらされる存在だけがある」

「他者を見つけた瞬間に他者がいなくなる。だが、他者は否応なく自己の存在を自分自身に知らせる……」

考えをまとめるように阿九斗はつぶやく。そして、思い至り、鋭く声をあげる。

「自身を自身と知ったことによる自己同一性の不快感……自同律！」

その悟りの瞬間、またも別の声が起こる。

「無貌宇宙は自同律を存在させる」

次は青服だった。

「我は重力宇宙。そこでは存在は外壁と同一化し、質量を持つ」

イメージは重力宇宙に変わる。

光と闇があった。

そして、そこでの存在は、アメーバ状でありながら、今度ははっきりとその周囲に壁を持っていた。細胞壁とでも喩えられるそれは、明確に光を反射して輝いていた。

《お前！》

その声はまだ響いている。

しかし、それは同音でありながら怒号のようであった。

今度は存在同士は明確に互いを目指していた。それらはぶつかり合う軌道を描いて宇宙を進んでいた。

「外壁により誰だ！　の声は内に沈む。他者を探して存在は進む」

青服の言葉で、さらにイメージが動く。

存在はぶつかり合い、外壁の弱い片方が、ぱっ、とはじけた。その存在は大部分が宇宙に溶けていくが、一部は、外壁の強い存在の外壁として取り込まれた。
「捕食？」
それを見て阿九斗が声を震わせた。
瞬間、聞いたことのない音声が存在から発せられる。
「外壁を無くせば存在そのものも消える。そこでは外壁がぶつかった瞬間に叫ぶ。殺した！　殺した！　殺した！」
阿九斗が言葉を失っていると、また、別の宇宙の声がした。
「重力宇宙は快楽を存在させる」
次は白服だった。
イメージは鮮やかに変化した。
星々の輝きがあった。
原始的ながら生物がそこにいた。
単細胞生物が分裂をはじめていた。
「我は反重力宇宙。そこでは存在は増える。外壁は膨らみ、分裂する。声は満ちる。俺だ！　俺だ！　俺だ！」
《俺だ！》

それは生まれ出ずる喜びの声だった。

「反重力宇宙は愛を存在させる」

そこでの存在は、互いを捕食したが、ぶつかりあった瞬間に互いの存在を分(わ)け与え、新しい存在を生み出すこともあった。

《俺だ!》

《お前だ!》

《殺した!》

《増えた!》

賑(にぎ)やかな声が満ちていた。

「こうなれば、僕の知っている宇宙まであと一歩ということか。すると、外宇宙は出そろったのか?」



と、阿九斗が声をあげると、各色の外宇宙の神々たちは否定の声をあげた。

「これらは、種々の宇宙を生み出した原型だ」

背後を見るように外宇宙の神々は促した。

阿九斗は地平線を見るともなく見やった。

そこには、地平線を埋め尽くす人々の影！　影！　影！

彼らはそれまでの者のように単純ではなかった。様々な服を着、性別もわかる。視線の端にだけ彼らの影がゆらめく。彼らはその内部にさらに何億もの存在を抱えているに違いなかった。一人一人が阿九斗と同じ幽霊たちを内側に抱えた存在なのだ。

「彼らは、僕と同じ存在なのか？」

そう聞いたとき、各色の外宇宙の神々は、それには答えず消えていった。

垣間見えた人々、すなわち宇宙たちも、やがてぼやけて消えていった。

今、テーブルには、阿九斗と望一郎だけが残されていた。

「私たちと同じ存在だろうな」

ふたりは衝撃にしばらく言葉を発せずにいたが、やがて望一郎が阿九斗の言葉に同意して言った。

「彼らも、君も、間違いなく同じ宇宙だ。神宇宙とでも呼ぶか。いや、君が世界の可能性を解放するまでは、君だけが彼らと同じだったと言えるかもしれない」

望一郎が阿九斗を指さした。

阿九斗は、長く息を吐き出し、うなずいた。

「宇宙の誕生は、物語の誕生に似ていた。宇宙が複数の物語だとすれば、外側には僕と似たような存在がいくらでもあるのだろうね」

「だとすると、スペクトルがあってもいいことになる」

望一郎は確信めいて言った。

「スペクトル？　何の？」

阿九斗が聞き返す。

「スペクトル。つまり、段階的に彼らは分けられる。それは、物語濃度とでもいうべきものだ。物語化されている度合いがそれぞれに違う。こう考えられる」

「僕らは物語化されている度合いが強い？」

「我々は世界を虚構のものと知っている。物語化されている度合いはかなりのものだ。そうは思わないか？」

望一郎の言葉は、阿九斗にも思い当たるところはあった。

外宇宙からの介入を受けたとおぼしき物語は、世界を虚構のものと捉えないことが中心となっていた。それは、確実に受肉した一回しかない生き方を前提とした物語だ。

「外を見て、はじめて自分のことがわかった気がする」

阿九斗はうなずいた。

「だが、結局のところ外宇宙の神々とて虚構なんだ。ただ、自身では神、人類、幽霊の区別がつかないだけだ。上位者に教えてもらうことで、そして、ひとつの宇宙に囲いを作った時のみ、神、人類、幽霊は、はっきりと分かれる。誰の内部にあるのか理解できるようになるということだ」

望一郎の分析に、阿九斗は考え込んだ。

「さて……そうなると、僕はいかにして上位者に答えたらいいのか？　ということを改めて考えることになる。僕は僕の内部だけでなく、自同律の宇宙の、その全存在を救いたい。彼らを物語から解放したい。それが望みだ」

阿九斗は言った。

今度は望一郎が考える番だった。

「……やはり物語をウィルスと考える他ないだろう。本来、生物は反重力宇宙から生み出された時点で完成されているべきだ。どれだけ細胞が複雑に、反射系が複雑になろうと、生物は補食し、殺し、産む。それだけだ。罪も、赦しも、そこにあるはずがない」

「しかし、外宇宙からの神は、理不尽な死の物語を僕の中に持ち込んできた。物語濃度は低いはずだ」

「それならば理不尽な死は自然なものだ。殺人に理由はいらない。それで説明は出来る」

「それでも僕らは無意味な殺人を忌避する」

「殺人の忌避も物語の仕業だ。だが、君は物語こそを大量殺人の原因とした」

望一郎の言葉に、阿九斗は再び考え込み、さらに別の者を呼ぶことにした。

地平線に向かって手が振られる。
遥か地平線から、屈強な、深い肌の色をした男が歩いてきた。
マリン。かつて共和国を率いて、無貌の力をふるい、阿九斗と争った男である。本人が望まずながら、世界崩壊の原因を作った男でもある。
「我こそはイデオロギーというイメージで呼ばれた気がして、いささか苛立たしい」
呼び出された幽霊たちの例に漏れず、マリンも最初は憎まれ口をきいた。
「僕は幽霊にいつも文句を言われている」
阿九斗は肩をすくめた。
「当然ながら、私たちを殺したからさ。だが、少なくとも、君は自らが糾弾されることを厭わず私に直面している。勇気だけは健在のようだ」
マリンは豪快に笑い、堂々とした態度で椅子に座る。
「君が僕の幽霊であるのなら、自賛になりかねない」
阿九斗はぼやく。
「気にせずともよい。人間も幽霊も他者から見分けはつかぬ」
マリンはうなずいた。

「ああ、それこそが、殺人を忌避する理由であるとも思えてきた。本当に他者であるなら、生物の法則以外に人は法を持たないはずだ」

「それが物語の良き側面だ。他者を幽霊として自らの中に存在させ、それを慈しむことにより捕食、殺人を避ける。生殖、分裂に有利でなくとも」

　ようやくわかったか、というようにマリンは阿九斗を見据えた。

「だが、僕は君を悪い側面の顕現と見ているんだ。だから、ここにいる」

　阿九斗はマリンを見返した。

「それは初歩の議論に戻りかねない。幽霊のあり方は、他者を作り出す。共和国民による共和国民の幽霊は、帝国民の幽霊により虐げられたのだ。それを幻想であると指摘することは、良い側面を捨てることでもある」

　マリンは、きっぱりと言い返した。

　阿九斗は痛いところを突かれた顔になる。

「なるほど。僕はそのために良き側面すら捨てる男だったさ」

「愛なき男だということだ、君は」

　マリンは笑った。

「それが僕の罪か」

　阿九斗が言った。いつも深刻な顔をしている男だが、この時ばかりは完全に表情が硬直していた。

と、マリンが、今度は自然な笑みを見せた。

「友よ、糾弾されるべきものの答えは出たな。それでいいじゃないか」

「しかし、それがなんだというのさ？　いわば、もう僕は僕の中から突破（とっぱ）できぬことになったも同然じゃないか。僕は皆を解放できない。矛盾（むじゅん）を抱え、それが解決できないことに決まったのなら」

阿九斗は感情を顕（あら）わにして言った。

「それなら」

いきなり望一郎が口を開いた。

「まずは、私たち以外を消してくれ」

その願いに阿九斗は戸惑（とまど）う。

「何をするつもりさ？」

「いいんだ」

望一郎の言葉には決意があった。

それで、阿九斗は、言われたとおり、マリンとテーブルを消した。

そこには静寂（せいじゃく）があり、向かい合って座る阿九斗とヒロシのみとなった。

「これで……いいのかい？」

「はい」

ヒロシはうなずき、言いにくそうに切り出した。

「実は、最初から決意してきていたんですよ」
「決意?」
「いや、最初からわかっていたんですよ。アニキ自身には解決できないことなんじゃないかって」
「心外だな……と言いたいけれど、違いない。僕は魔王と言われただけのことはある。兵器であり、最終的には論理だけで愛がない」
「生前に気づいてくださいよ」
　ヒロシは笑った。
　今度は阿九斗もつられて笑う。
「違いない」
「じゃあ、本題に入りますと……」
　ヒロシは身を乗り出(だ)した。
「俺(おれ)が主人公の世界を作ってください」
「え?」
　阿九斗がきょとんとする。
「だから、俺が主人公になる世界です。なるべく物語濃度を低くして」
「主人公になりたかっただけ……ってわけじゃなさそうだ」
「はい。俺が普通の人として暮らす世界。それをお願いします」

ヒロシは真剣だった。それだけに、阿九斗は理屈がわからない様子だった。

「それでどうなるんだ？」

「物語化が薄い世界で、過去の記憶を持ったまま人生をやり直し、そこで物語を消すための物語を書くんです」

ヒロシは言った。

阿九斗は目を見開いた。

「それは……驚いた話だね」

「物語には良い側面もある……だから、物語そのものを消し去ることは不可能かもしれないけれど、少なくともアニキの物語を終わらせることはできる」

「つまり、君は僕の物語をそこで書き……終わらせる」

「はい」

考えたこともない提案に、阿九斗は戸惑った。

「そんなことを、君に頼んでいいのかい？」

何が起こるかは予測できないが、少なくとも成功すれば、それが完全なる終わりに向かう行為であることはわかる。

「いいんですよ。これは俺にしかできないことだし、少なくともアニキを殺すことは俺の目標だった。そして、そうすることで、この世界全体が救われる。そんな気がしているんです」

ヒロシは穏やかに言った。
その顔をまっすぐ見据えて、しばらくしてから阿九斗はうなずいた。
「わかった。じゃあ、この死後の世界を再構築しよう。外宇宙の神々の影響を強くして、マナ文明以前の世界に戻すということでいいかい？」
「はい。一九九〇年代くらいでいいんじゃないでしょうか？」
「やってみよう。どうなるかは……君に任せるよ」
阿九斗は世界を再びその手の中に丸め、再び、広く展開させた。

# 5　授肉

俺たちの精神は、何者かが注入した〝物語〟というウィルスに侵されている。

と、いった。

物語を捨てなければならない。

とも。

そして、原初の人類。そして〝物語〟の発生について見てきた。

結果、ここに俺がいる。

この物語の記述者だ。

とはいえ、俺が俺の使命に気づくまでには、冒頭で述べたように元恋人の死という経験が必要だった。

物語濃度の薄い世界で生活することになった俺は、いわば記憶を失ったような状態にあったわけだ。多少、物語的にオーバーな体験が必要だったということなのかもしれない。

記憶がよみがえった俺は、物語を終えるための物語を、紗伊阿九斗の人生を追う形で、それなりに長い時間をかけて書いてきた。そして、その積み重ねの最後の部分がこの文章になるだろう。

とはいえ順調な道のりではなかった。物語も終わりに近づいた二〇一〇年ほどになってから、書き始めるのに決意が必要になってきたのである。脳内に思い浮かぶことはなにもなく、ただ鈍い頭痛だけが居座

っている。肩から上は常に見えない輪で締め付けられているかのようで、不可思議な居心地の悪さと動きを制限する重さとが、ただ立ち上がることにさえ影響していた。

その不快感は、記録を書こうとする意識が強くなるほどに増していった。

古来から書き手がそれをなんと呼ぶかは知っていた。有り体に言ってスランプ、ライターズ・ブロック。気取った者であれば、蚕食してくる黴、襲ってくる黒い犬と名付けただろうが、自分はもっと馬鹿っぽく〝キチガイおばけ〟と呼んでいた。

〝キチガイおばけ〟は、部屋の隅にいて、俺がそこを注視してしまうと、肩にのしかかってくる。眠るか、まったく頭を使わない気晴らしでもしていればいつのまにかいなくなっているが、そうもいかない場合は肩の不快感を押しのけるために、ちょっとした運動をしなければならなかった。やっかいなことに、この運動はかなり負荷をかけなければ効果が無く、しかもギャンブルに似た性質を持っていた。楽になることもあれば、強烈な吐き気を伴う肩の痛みを産むときもあったのだ。

苦痛は日常生活を完全に蝕むようになっていった。

そいつをやっつけることも、飼い慣らすことも、ほぼできないと気づきはじめた頃、ようやくそいつの正体に思い至るところがあった。

軽さ、である。

つまり、書こうとしている内容が軽ければ軽いほど、書き始めることに妨害が入っている、ということだった。

軽さ、については詳しく書かねばならない。いわゆる軽薄さであれば物事を深く考えないさまをさすが、この場合、仮想性が濃いという意味だ。

まず肉体を離れたキャラクターたちが主人公となる。すなわち、普通の人間なら死ぬほどの物理的衝撃を受けても大丈夫で、ときには超人的な力を発揮する。そのため、キャラクターは普通の人間とは思えない偏った性格をとる。

物語は幸福なラストに向かって書かれ、たとえ不幸があるとしても、それは何らかの意味のある事態である。不幸な物語を避けるため、キャラクターたちが年齢を経ず、精神性も不変な場合がある。

このような特徴を持つ〝軽い〟物語を書くとき、常に不調は襲ってきた。

逆に〝重い〟物語の際はどうか？　これも、気晴らしに書いてはみたが、やはり、そこに仮想の度合いが大きくなれば——キャラクターに現実感があろうと物語が架空であれば——書き続ける先には〝キチガイおばけ〟が待ち構えていた。

それが〝物語〟の妨害であることは明らかだった。

〝物語〟の本質が見えてきた気がした。

これは、物語を捨てるために書かれている物語であり、それが抵抗することは明白だったのだ。思い起こしてみれば、ここに至るまで様々な困難があったが、それもすべて物語そのものが俺の記憶や行動自体を操作していたのだ。

書物の売り上げについても言える。人は、軽い物語を恥ずかしく思っている。だが、実際に好まれるのは、非常に軽い物語だ。軽い物語、欲望を充足させるような物語を、多くの人は隠れて買う。一方、重い物語は、人間の本質をとらえているとされ、それを記した者は讃えられ、知的な者とされる。または、いかな荒唐無稽な物語でも、それが宗教の教典となれば、すべて真実であると信じることが良いこととされる。

〝物語〟自身は、重力のようなものではないのか？　その重さで人を縛りつけ、〝軽さ〟を避けさせようとしていまいか？

　そして、人間の本性が〝軽さ〟を求めているならば……。

　脳内で何かが音を立てたような気がした。俺の使命を実行する方法がはっきりと理解できた。この世界は魔王が作ったものだ。そして、魔王を、その沈んだ思考を、〝軽さ〟へと導かなければならない。

　そのために為すべきことはすぐに浮かんだ。

　自同律は、この世界にアクセスが可能なはずだ。それは、魔王の行動をケーナが止めようとしたことからもわかる。自同律は、物語のきちんとした終わりを望んでいる。だから、自同律に物語の消失を見せつけてやるのだ。

　世界の成り立ちを考えれば、自同律は魔王に気づかれずに潜伏していることになる。この世界を構築する普遍的な存在は魔王だが、物語を成り立たせる自己同一性、つまりキャラクターそのものが自同律

がなければ生まれなかったものだ。なのに、魔王は自同律をこの世界に見いだしては居ない。けーなが眠っているという思い込みがあるためだろう。

言い換えれば、俺の目的は、自同律と魔王を出会わせることにある。そして、仲介となるのが、この〝物語否定の物語〟というわけだ。その探索こそが〝最後の物語〟になるはずなのだ。

「つまり、何が言いたいのかわからん」

俺は、口が悪い服部絢子を、蒲田の駅構内喫茶店に呼び出し、上記のことをなんとか説明した。

いや、説明したつもりだった。

絢子は割に頭が切れるタイプだが、頑固で突飛な考えを受け入れないところがある。

ここで、絢子とは誰か？　を説明する必要があるだろう。魔王が物語を二〇〇〇年前後に巻き戻したことで、俺たちは別の人格と人生を与えられたわけだ。いわば一九九〇年に、世界が生み出され、そこでねつ造された過去の記憶までまとめて持っている存在となったのである。だから、ここでの絢子は、俺のかつての仕事仲間だったことになっている。その容姿も物語性は一切はぎ取られているわけで、どちらかといえば痩せぎすの、率直に言って地味な女だ。

「つまり、この世界はついこの間つくられた……とはいえ、十年くらいは経ってるけど。……んで、その前のキャラクターとしての記憶をよみがえらせて欲しいわけ」

俺はさらに話を進めた。理屈ではわからなくとも、記憶という感覚に訴えればなんとかなるかもしれないというわけだ。

「古い漫画にそんなのあったけどね。前世ものっていうやつ？」
　絢子は面白そうに言った。記憶がよみがえる前から、俺は彼女に小説やライター仕事のことで相談をしていたことがあったから、奇っ怪な話をするのははじめてではない。普通なら頭がおかしくなったと思われるところだろうが、空想的な話には慣れ親しんでいる。
　しかし、その感覚は、フィクションと現実を切り分けることでもある。実際に自分が〝軽い〟物語性を抱えているなど認識しがたいというわけだ。何しろ認めたら、自分まで気が狂っていることになる。
「……まぁ、前世ものみたいな遊びだと思ってもらえてもいいよ。ともかく、それを俺はマジで探しているっていうか……いや、遊びでいいんだけど、俺たちの過去の記憶に共通して登場する人物とか、いない？」
「記憶を全部さぐれって、そりゃ無茶でしょ」
　絢子はアイスコーヒーを面倒そうにかき回しながら言った。
「ライターになった切っ掛けにかかわった人でいいよ」
「それなら」
　絢子は手帳を出してきて、その付箋がごちゃごちゃはさまったページをめくりはじめた。そして、レシートやらカードやらがはさまったビニールのリーフを見つけると、そこから折りたたんだ一枚のコピー用紙を取り出した。
　住所録を縮小コピーしたそれには、名前と住所が書かれていた。
「テーブルトークの時の名簿。この子。この子」

絢子が指さした先に、奇っ怪な名前が記してあった。
「本名じゃないな。いわゆる中二的な」
「若かったからねー。ペンネームだよ。でも、それでしか呼んでなかったな。この子のせいでゲームにどっぷりはまってさ。それでライターになったの」
絢子は懐かしそうに笑った。
俺は住所を書き写した。
「本名は？」
「あー……なんだっけ……忘れちゃった。うーん、憶えてたんだけどな」
「ま、いいよ。そういや、ゲームからの知り合いなんだって？」
絢子は、古くなってけばだったコピー用紙を大事そうに折りたたんだ。
テーブルトークとは、テーブルトークＲＰＧのことで、ゲームのキャラクターを演じ、ストーリーを紡ぎ出していく遊びだ。会話していくだけで偶発的に生まれてくる〝物語〟を楽しむものでもある。
「またやりたいけど、時間なくってね。その子探すの？　会ったら私のこと伝えてよ」
絢子は笑顔で言った。
彼女は、かつて〝物語〟生成を楽しみ、そのためにライターになったのだということがよくわかった。
すぐに記された住所には行ってみたが、そこには住居らしきものはなかった。代わりに新しいビルがあった。どうやら記載されていたアパートは取り壊されたらしい。そういえば、絢子がゲームをやっていたのは

大学生の時だと言っていた。中二ペンネームの彼女も、大学生らしくボロアパートに住んでいたのだろう。かつてのアパートの住人の居場所などを調べるには、かなり面倒な作業が必要そうだ。それよりは、先に転生（?）した仲間たちを調べるのが早い。

次にアポイントが取れたのは淑恵（よしえ）だった。

「なんで仕事についた切っ掛けとか知りたいの？　相変わらず頭おかしいねー」

彼女の口の悪さは絢子に数倍する。軽口を通（とお）り越（こ）してただの罵倒（ばとう）になることもよくある。小柄（こがら）で、体つきも貧弱だが、手足の動きと声はえらく大きい。残念ながら、天才というわけにはいかず、常識外れにマイペースなところと、眼鏡だけが共通点だ。

渋谷（しぶや）の編集プロダクションに所属していて、昔、一緒（いっしょ）に仕事をしたことがある仲だ。仕事にかこつけて、事務所で会う約束を取り付けていた。

彼女には、他人の話を聞くという能力が欠如（けつじょ）しているので、かつての記憶や、それに類することを言うわけにはいかなかった。「現実見ろ」の一言で話を打ち切られてしまう。それでいて男性アイドルグループの話には乗ってくるので、彼女の言う現実とは、実在かどうかという分類でしかない。正直、どうして物語を扱（あつか）う職業についたのかは理解に苦しむところだ。

「ライターの人間関係のつながりを調べてるんだよ。ある年代だったら、同じものに影響を受けていたりするし」

俺はそう言って誤魔化（ごまか）した。

「だったら、友達に楽で金になる仕事だって言われたから」
　淑恵は言った。
　彼女自身はライター経験なし、小説、映画、共に興味なし。それでいながら、友人の、すでにライターをしていた女性にこの仕事を紹介されたらしい。
「やりたいことなかったし。やってみれば事務仕事ばっかりで面倒なんだよ。お前から会社に言ってよ、給料あげてくれって」
「俺は外部委託じゃねぇか」
「じゃあ、あたしの良い評判流して。それと、食事おごれ」
　淑恵との会話はいつもそういう風に逸れていく。何事も深く考えずに即物的なのである。ともかく用件を終わらせなくてはいけないと、俺は仕事を紹介してくれたという人物のことを聞く。
「横浜の人だよ。そこの編プロにライターとしてまだいるはず」
　横浜の会社名を聞いて、それをメモした。
「それにしても、ライターはどうしてそんなどうでもいいこと聞くの？」
　淑恵が聞いてきた。彼女は当然のことながらライティングにまったく才能がない。紹介された都合なのか、首にはされず事務職に回されたわけで、普段、ライターを仕切っている（と彼女は信じている）ため、ライターの行動にはとにかくケチをつけようとしてくるのだ。
「お前にはわからん」

俺は言い切った。かつての淑恵のような聡明さは期待できない。今の彼女は、現世利益にしか興味がない。いや、率直に言えば、金だ。男はどこかで引っかけているようだが、ともかく欲望の大半は金に向かっている。それはそれで幸せなことである。

「だけど、こんな仕事してるんだから、ライターの書く物語に救われたことくらいあるだろうに。無かったか？」

俺が聞くと、彼女は即答した。

「金曜のドラマは見てるよ。あれ、次回気になるよねー。脇役だけど、あの子がすんげぇ格好良くて……」

淑恵は話し始めた。

俺は適当に話を切り上げなければならなかった。

それにしても……。

こちらでの淑恵は、あまりに〝物語〟に無頓着だった。いや、無自覚だったと言っていい。〝軽い〟物語には反応していたが、自らを操っている、金という価値観が〝物語〟だとは気づいていないし、それだからこそ金銭的な成功も得ていない。自覚できるほどに強欲か、欲望を制御できる者でないと金は貯まるまい。

それでも、彼女は口ほどには不幸ではなかった。いずれ適当に結婚して、それなりに幸福に暮らすはずだ。いや、もし、この世界が永続するならば、だが。

結局のところ、彼女も〝物語〟に救われているのだ。〝軽い〟物語には日々の慰めを得て、〝重い〟物語には無自覚に従う程度の自我しかない。

〝物語〟に飼い慣らされる。そんな言葉が脳裏に浮かぶ。
だが、それが言語化された時、同時に自分を疑う感覚も襲ってきた。もし、この世界が完全に現実で、俺の脳裏にあるものが妄想だとすれば、〝物語〟こそウィルスであり、それを自覚しているかどうかがこの世界での特別性を担保している、という考えは、狂気とまったく同義の傲慢さとなるからだ。
結局、自分の行動が間違っているかどうかは、この探索の後に明らかになる、と信じる他はなかった。淑恵から紹介された編プロに人づてで連絡を取ってもらう。やることは淑恵の知り合いが在籍しているかどうかの確認だから、番号が判明すれば電話ひとつでなんとかなる。
回答はあっさりしたものだった。
「該当する社員はおりました。しかし、去年辞めてしまいまして」
社長が直接、答えてくれた。
俺は名前を聞いた。
「ええと……○○……いや、曽我です」
最初に言った名前は、どうやらペンネームだった。そして、それが絢子から聞いた名前と一致したことに、俺は驚いていた。さらには続く本名が曽我だったことに。
俺はつい弾んでしまう声を必死に抑え、仕事があったら連絡してくれ、と社交辞令を言い、電話を切った。

やはり、俺たちのここでの人生に介入してきたのは同一人物であり、自同律であるという考えが現実味を帯びてきた。住所は社長から聞いていた。後はそれを追うだけだ。

横浜駅から旧高島町駅の間。そのマンションの一室がそれだ。

そのあたりは、住宅地とも商用地とも言い難く、ただ開発に取り残されたかのようにタイル張りの無用地が広がっていたり、高架下の空き地を誤魔化すかのように木が植えられている。横浜の活気から数分移動しただけなのに、虚無にも似たものが広がる奇妙な空間だ。

マンションはそれなりに新しいし、豪華でもあるのだが、不思議と場末の臭いがした。はっきり言えば、治安の悪い地域に特有の薄暗さと、人気のなさが不気味に感じられた。

当該住所の表札を見る。そこに書いてあるのは、「曽我」とは違う名前だった。

外れかもしれないが、確認してみる価値はある。もし違う住人が入っていたとしても、近い時間内の転居であれば、郵便転送がされていて転居先を聞けるだろう。

ベルを鳴らし、インターホンで「曽我さん」を訪ねてきた旨を話す。すると、扉が開いて、中から顔を出したのは、旧知の人物だった。

「やっと来たね！」

不二子だった。もちろん、こちらの世界では違う名前だが。

彼女は長い黒髪の美人で、そこだけはフィクション的な人物だった。既婚だし、俺の好みのタイプではなかったが、対面すると緊張してしまう。二人で居るだけで周囲から好奇の目を向けられる程に目立つ容

姿なのだ。だが、それ以外は凡庸で、外見と裏腹に気さくな性格。売れない占いのライターで、公務員と結婚している。仕事の都合で、俺ともよく連絡を取り合っていた。

「ここに？　住んで？」

　俺は素っ頓狂な反応になってしまう。

「曽我さんの件でしょう？　入って」

　不二子はサンダルをつっかけると、ドアを大きく開けてくれた。

　中は木目調のテーブルに食器棚、白の壁紙と目立つところはない。ただ、旦那と住んでいるとは思えなかった。食器の数と放置されているスリッパからするに、明らかに一人暮らしのリビングなのだ。

「いろいろ聞きたいことが出てきたんだけど……」

　俺が言うと、不二子は満面の笑みで俺を指さしてきた。

「記憶が戻ったんでしょ？　いや、すごかったよね！」

「つまり、コンスタン魔術学院の？」

　おずおずと切り出す。

「そう！　まったく驚いたよね！　ファンタジーみたい」

　不二子は俺に椅子をすすめるのも忘れてまくしたてた。これ以上ないくらいの大当たりだ。やや目眩がするほどに。

「もうちょっと深刻な話になってたと思うけどね」

俺は少し引き気味に言う。
不二子はそれでテンションをやや弱めたが、この世界であの頃を憶えている者がいないためか、いろいろと話したそうだった。そこで、俺も記憶をはっきりさせるため、そして自分の記憶が間違っていなかったことを確かめるため、ひとしきり思い出話をすることになった。
確かに俺と不二子の記憶は一致した。奇妙だったのは、どちらもここでの人格が残っていて、まるであの頃のことが夢のように感じられたことだ。話している俺たちの人格も、ここでのものから大きく外れることはなかった。俺は作家としての自分をなくすことはなかったし、不二子も高飛車で世界征服を夢見るようなこともなく、気さくな占い師のままだった。
「あの時の自分を自分だと思えるのって、不思議だよね」
不二子は言った。
「しかし、俺たちの記憶が一致するとか有り得ない話なわけだし」
「読んでなかったけど、読んでみるよ、君の小説」
「読んでなかったのか」
俺は肩をすくめた。
「……読んでたら、記憶のこと、疑ってたよ、絶対」
「それもそうか。俺も最初の頃は半分自覚せずに書いていたしな」
「それで、曽我さんのことなんだけどさ」

不二子は切り出した。

「それだ。ここって、曽我さんが住んでたんだろ?」

「うん」

声を潜(ひそ)め、不二子はうなずいた。

「どうして、そんな顔を?」

「あ、秘密だって言われてて」

「秘密?」

「その……私の記憶が戻ったのも、君よりちょっと前のことでね。前世占いっていうの? そういうのをやってて気づいたってわけ」

「それで、どうして曽我さんにたどり着いたって?」

「まず私の場合は、自分の記憶を疑ったのね。つまり、一九九〇年から以前の」

「ああ、やっぱりそれ以前は植え付けられたものだったんだよな」

「その記憶の、つまり、私がこっちの世界に来てから最初の記憶を探(さぐ)ったの。そしたら、曽我さんが関係してた」

「なるほど。俺も追いかける手段は間違ってなかったわけだ。絢子も、淑恵も、この仕事についた最初のきっかけが曽我さんだったんだ」

「でも、君だけ特殊(とくしゅ)なんだって」

「俺だけ？」
「そう。君には、手紙だけしか出していないんだって」
「手紙だけ？」
「うん。なんでも、直接には会えない……って、言ってた」
「そりゃまたどうして？」
「うーん、なんかちゃんと説明は受けたんだけど、はっきりとはわからなかった感じなんだよねぇ。たぶん、阿九斗は君を通じて世界を見てて、だから、自同律と出会っちゃいけないってことなんだと思うんだけど」
　どういうわけか、申し訳なさそうに不二子は言った。
　俺は不安になる。
「でもさ、連絡を取れないってわけじゃないだろ？」
「ネット経由なら話せるらしいよ」
　不二子は食器棚の前に置かれたメモ帳を持ってきた。そこには、ネット電話のアドレスとおぼしき英文字が書かれていた。
「なんとも冷たい話だな」
　求めていたものに対して、いかにも軽い。だが、〝軽さ〟をこそ求めたのだから、それはこの探索のラストにふさわしかったのかもしれない。

「別に急がないでしょ?」

不二子は言った。まだ話し足りないことがあるのだろう。

「ああ」

俺は答えた。

彼女は確かに思い出話を楽しんでいた。俺にとっては〝重い〟あの日々を。

結局、家に帰ったのは深夜になったが、俺はPCを起動して、ネット電話ソフトを立ち上げた。対話できるものなら早いほうがいい。

コール。

相手はすぐに出た。

「待っていました」

淡々（たんたん）とした声が聞こえてきた。

映像はない。

「曽我さん?」

「その名で間違いありませんよ」

俺の記憶からすると、この話し方は曽我けーなのそれではない。自同律だ。

「俺のところに来た手紙ってのは、曽我じゃなかったけれど」

不二子が言っていた〝手紙〟のことを思い出していた。

作家になったきっかけの手紙。それは幼なじみからもらったものだ。もちろん、今となっては、それがねつ造された記憶だと言うことは知っている。当時、俺は妙に感動したものだ。ねつ造だとしても、そうとは信じたくない記憶だ。

「騙したみたいで悪いけれど、私はあの手紙の私です」

「そう言ってもらえると、救われた気もする。いや、そうでもないかもな……君もこの世界で生きている記録はあるのかい?」

「はい。あなたが調べた通り、あの後、皆さんと知り合い、あなたの知らない人と結婚して、家庭を持っています」

なんとも馬鹿にされたような気分になった。

もちろん、幼なじみとその後再会した記憶はないが、中学生の時分に俺の才能を買ってくれて、こっそり手紙までくれた子に好意を持たないわけがない。

「ひどい落ちを用意したもんだな。それに、顔さえ見せないなんて」

「あなたの前では、私も物語にすぎませんから」

自同律は言った。

違いない。俺はネット越しに会話をしているだけだ。疑うならば、いくらでも現状を疑える。不二子は絢子と顔見知りだから、俺が妙なことを言い出したのを知っていただろう。さらに俺が出版していた小説を読んでいれば、俺と話を合わせることはできる。自同律のねつ造など簡単なことだ。

「あんたが偽者だとしても、価値は減じないってことか」
「全部嘘だったとしても、大事なのは彼が納得するかどうかですから」
「彼、つまり魔王、か。俺はあなたを、自同律を納得させるのが目的だと思ったのだけれど。あんたがみんなを救うんだろ?」
「いいえ。強いて言うならば、双方です。あなたは魔王の物語を記録した。それは、あなたがこの世界を正しく認知したということになります。だから、あなたの納得は、彼の納得でもあるというわけ。そして、もちろん私も納得しなければなりません」
　自同律の声は機械で変換されているかのように平板に響いていた。
「つまり、俺たちが、この物語の終わりを納得し合う、と」
「そう。だから、見せてください。あなたの記録を」
　俺は促されるままに、最後のファイル、つまり小説の最終巻をネット電話で送信した。
　受領の合図が返ってきた。
　それから、しばらく待った。
　俺は、向こうが口を開くまで何も言えなかった。
　記録は記録であって、そこに意味を見いだせることなどない。
　ただ〝物語〟が否応なく干渉してくるだけだ。
　今は〝重さ〟の方が強い。

「ウィルスに冒されたのは、精神であると思いますか？　肉体であると思いますか？」

　自同律の第一声がそれだった。

　わからずとも答えるのは義務だ、と思った。

「両方……でしょう？　肉体が最初に冒されるのだとは思うけれど、操られているのは精神だ」

　しばらく沈黙があった後、再び質問が来た。

「彼が知るべきだった真実は、物語の終わりであり、それを知ることで人々が救われると信じた。そうですね？」

　奇妙な問いだ。それで何を確認しようとしているのか。

「そう言い切れるものではないけれど、そう考えていたな。彼は世界を救おうとはした。いや、少なくとも死後の世界があり、自同律があるのなら、なんらかの救いがあるはずと信じただろうと思う」

「そこまで自覚しているあなただから、私から最後の言葉を伝えましょう」

「はい」

　俺は、待った。しかし、躊躇しているかのような沈黙がそこにあった。

「どうしたんです？」

「いいえ、伝えます」

　自同律は言った。

「あなたは授肉し、ここに囚(とら)われます。それこそが勇者の役目なのです。世界は救われ、そこに生きた人々と、〝物語〟の軽さに身をゆだねることができた者は、いずれ私の許にやって来ることになるでしょう」

その後、言葉は来なかった。

「おい、おい！」

俺は呼びかけた。

しかし、答えはなかった。

それどころか、相手のアカウントそのものが消失していた。

かつがれたのかもしれない。あるいは、俺の頭が本当におかしくなっていただけだったのかもしれない。

絶望的な意味を持つ言葉だけが脳内に反響(はんきょう)していた。

これで何かが終わったらしい。

いや、終わった。

それだけはわかる。

確実に。

だが、何が終わったのかはわからなかった。

俺には確実に、やはり確実に明日がある、という気がしていた。朝日は昇(のぼ)るだろうし、しばらくしたら締め切りの原稿(げんこう)だってある。

しかし、終わったのだ。

彼の〝物語〟が。

紗伊阿九斗の望んだことが。人々の救済が終わったのだ。

眠れぬまま夜が明けた。

外に出た。

変わらぬいつもの街の景色があった。

コーヒースタンドに入ると、ホットドッグとコーヒーを頼むことができた。店員は確かに存在する人間だった。

昼近くなって、不二子に連絡を取った。

彼女は昨日のことを憶えていなかった。だが、彼女はとても幸せそうな声を出していた。そう、あの世界の話をする時のように。

絢子からはゲームの誘いが届いた。しばらくぶりに遊びたくなったのだそうだ。

淑恵に連絡を取るのはやめておいた。

いや、三人とも、もう不二子、絢子、淑恵ではないのだ。こちらでの名前で呼び、付き合うべきだろう。

仕事場に向かおうと歩き出す。

足下で、何かがチャリ、と金属音を立てたような気がした。

足かせだ。重量感のある鎖が足下に巻き付いている……ような、感覚に襲われた。

その正体は〝重い〟物語だ。

俺たちは、自分たちを縛り付けているだけのそれを、まだ有り難いものとしてとらえ、時には、〝軽い〟物語を使って一瞬(いっしゅん)だけそれを忘れる。

しかし肉体を持たぬ彼らは、〝軽く〟飛び去って行ってしまったに違いない。俺たちに〝物語〟から逃(のが)れるためのヒントだけ残して。

わだかまるのは身体持つ俺たち。

ここに満ちて、ただ彷徨(ほうこう)しつづける。

# 6　進化

ころねは、呼びかける声に、のんびりと起き出した。

「記憶（きおく）を呼び出すまでお待ちください。……失礼、身体のオイルが粘度（ねんど）を増しています。オイル缶（かん）を取ってもらえますか？」

布団（ふとん）に半身を起こしたころねは、受け取ったオイル缶を、それがコーラでもあるかのように、ぐい、と飲み干した。

「面倒なので数字を言う必要もないでしょう。一万年以上かかっていますよ、阿九斗（あくと）さん」

ころねは微笑（ほほえ）んだ。

「そりゃあ、悪かったよ。でも、時間なんて関係のない次元にいたわけでさ」

阿九斗はばつの悪そうな顔になる。

「自分にはよくわかりませんが、ともかく何かが解決したのだと思いましょう」

ころねは身体を起こし、周囲を見回した。

一万年の変化は、室内の劣化（れっか）という形で現れてはいたが、それでも各種機能はまだ十分に動いていた。

ここは最後にけーなが眠（ねむ）りについた宇宙ステーションだ。

「あなただけなのですか？」
　パジャマ姿のころねは聞いた。
　ステーションの一室には阿九斗しかいない。
「そうだよ。でも、僕(ぼく)が呼べばすぐに誰(だれ)でも来てくれる」
「よくわかりませんが？」
　ころねは不思議そうに言った。神々からデータを呼び出そうとして失敗したのか、小首をかしげる。
「神々は反応しません。転送円も呼び出せません。人類はいません。どうやって？」
「いいんだ。後でわかる。ところで……」
　阿九斗は、窓の外を指さした。
「地球は、ずっとこうなの？」
「そうです。まだ生き残った生命が繁栄(はんえい)するには早いですね」
　ころねは眼下の地球を見て答えた。
　地球は隕石(いんせき)の影響(えいきょう)か、一部に海が残るのみで、後は茶色の瓦礫(がれき)の塊(かたまり)のようになっていた。
「ヒロシさんが頑張(がんば)ったのですが、無駄(むだ)でした」
「最後に隕石を止めようとしたのか」
「はい」

「そうか。彼はそういう男だったね。僕も助けられた。彼だけが、たぶん、真の友達だったと言える。ああ、でもね、さっき誰でも呼べるとは言ったけれど、彼だけは呼べないんだよ」
　阿九斗は表情に影を落とす。
「先ほどから本当に不思議なことばかり言っていますね。何があったのですか?」
　ころねの質問に、阿九斗はうなずいた。
「説明は難しいな。でも、大丈夫。時間は後でたっぷりとある。たぶん、君は連れて行けるから」
　不思議そうなころねに、阿九斗はウィンクをしてみせた。
「以前のあなたではないようですね。ともあれ、なんらかの目処がついたのなら、陛下を起こしましょうか?」
　ころねが部屋の端を見やった。そこに棺桶型の冷凍睡眠装置がある。
「お願いするよ」
「ではそうしましょう。しかし、誰でも呼べるのでしたら、どなたか他にお世話させる者を呼ぶべきでは?」
　ころねが聞くが、阿九斗は首を振った。
「他に人が居ると、感動の再会に水を差される」
「そうですか。しかし、少々お待ちください。パジャマでは失礼ですので、着替えます」
　ころねはパジャマを脱ごうとした。
「早くしておくれよ」

阿九斗は、冷凍睡眠装置のコンソールを操作しはじめる。機械は作動したが、目覚めるまでにはあと少々の作業と時間が必要だった。

「ほう……」

ころねは下着姿になりつつ、感心の声をあげた。

「女性の裸（はだか）を見ても平然としているとは。何かが変化しているとは思いましたが、つまり、童貞（どうてい）をお捨てになられた、と」

「あのねぇ……」

阿九斗は閉口したが、否定はしなかった。

「なんとも張り合いがない大人の対応。成長なさいましたね」

ころねはわざとらしく涙（なみだ）をぬぐって見せた。

「それで、童貞を捨てた相手は？」

「気にしないでくれるかな、そういうことは……」

阿九斗はぼやく。

ころねはもぞもぞと制服を着込み、阿九斗はコンソールの入力を終えた。

冷凍睡眠装置の解凍（かいとう）までのカウントがはじまる。

「感慨深（かんがいぶか）いです。これで地球再興の目処が立ったというわけですね。帝国（ていこく）は再建できるのですか？」

ころねが言った。

と、阿九斗が首を振る。

「いいや。地球には行かない」

「とはいえ、ここには移住できるような星はありませんが？　太陽系以外に星はないわけですから……」

驚くころねに、阿九斗は「どう説明したものか」という顔になる。

「どうしました？　やはり隠し事はやめて説明を……」

「いいや。僕らは、いわば進化するんだ」



「進化？　不思議なことを言いますね。そもそも生物の進化とは……」

説明しかけたころねを阿九斗は制す。

「いや、わかってる。でも、進化としか言いようがないんだ。つまり、僕らは別の宇宙にシフトする」

「……シフト？」

「そうなんだ。つまり……」

言いかけた時、冷凍睡眠装置が音を立てた。

阿九斗は説明を切り上げ、棺桶のような蓋（ふた）を開けるスイッチを押（お）す。

重たそうな蓋が、ガチリと音を立てた。隙間（すきま）から冷気が流れ出してきた。蓋はそこから横にスライドする。それまで棺桶と見えていたそれは、今はベッドに見えた。

横たわっているのは、姫（ひめ）でなく皇帝（こうてい）だが、白無垢（しろむく）の美少女には違いない。

冷気に包まれ、静かにけーなが眠っていた。

その姿は、ついさっきうたた寝（ね）をしてしまったかのようだった。

しかし、阿九斗にとっては長い間、待（ま）ち焦（こ）がれた顔である。

「やはりここはキスで起こすのがいいですね」

ころねは茶化（ちゃか）したつもりかもしれなかったが、阿九斗は何も言わずにけーなの上にかがみ込んだ。

す、と顔を近づけると、不規則な吐息（といき）が阿九斗の頬（ほお）をくすぐった。

「起きてたな」
阿九斗が言うと、けーなは目を閉じたまま吹き出しそうになったが、その唇をすぐにふさがれる。
長いキス。
けーなの腕が阿九斗の背中に回り、そのまま二人は起き上がった。
「会いたかった」
「あたしにとっては、昨日のことみたいだよ」
「それなら苦労はかけずに済んだってことか」
阿九斗は安心したように言った。
「でもね……」
けーなは含みを持たせて言う。
「長い夢は見ていた気がするんだ。つまり、あっちであったこと、ちょっと事情は知ってたりするんだよ……ね！」
けーなは服の上から阿九斗の脇腹をつねる。
「痛っ……あっちでの事情って……あ！」
阿九斗は、自同律が死後の世界での自分の行動を知ったのだろうと気づき、冷や汗を流した。絢子、不二子、淑恵のことを言っているのだろう。
「いや……それは……その……」

狼狽（ろうばい）する阿九斗に、けーなは笑いかけた。

「でも、許す。これから、ずっと一緒（いっしょ）でしょ」

けーなは言って、阿九斗の手を握（にぎ）った。

「どんな生活になるかは、僕もわからないけれど」

「んー、これから行くのは、全部のお話が終わるところ。この先もずっと人類が目指すことになるところ……だって」

けーなは自同律から聞いたのか、まるで意味がわかっていないかのように言った。

「この先もずっと人類が目指すところ……か」

阿九斗はつぶやく。

人類は〝軽い〟物語を通じて永遠の夢を見るのだろう。物語の軽さがやがてゼロになる場所を目指して。

「虚体を生み出す儀式（ぎしき）、をするんだっけ？」



阿九斗は聞いた。
「そういうことみたい。詳しく考えてもわかんないけど、つまり、あたしたちの本当の結婚、だよ」
けーなはワクワクしたように言い、阿九斗を待たずに、〝それ〟をはじめた。
それは物語だけでなく身体が零を越えて、虚となる儀式。
不となる身体＝虚体を産みだし、この世ならぬ存在になるための一歩。
虚数としてのデータ。
時間の無い空間。
物理法則の終わる場所。
因果の向こう。
解脱。
すべての者の救済。
けーなは阿九斗の手を取った。
マイナスへと変換されるべく、すべてのさざめく霊魂たちが阿九斗からけーなの中へ。
声が響く。
様々な声が二人の間に満ちる。
絢子の、淑恵の、不二子の、リリィの、女たちの、男たちの、様々な思い。
「救われるって、どんな感覚なんだ？」

「味わったことがないからわからないんじゃない？　ま、経験してみればわかるさ」

「阿九斗様と心底から結ばれる感覚に決まってますわ！」

「気楽な生き方してきたねぇ、キミ。ボクはどうでもいいかなー」

「会長、少しは欲を出していくでありんすよ」

「食欲とかぎゃ」

「ぐが」

「それより、名誉欲（めいよよく）って満たされるんですか？」

「救済というとヘムヘムしか考えないとか野蛮人（やばんじん）だな！」

「お黙（だま）り、色黒蛮族（ばんぞく）！　むしろ気楽なのは会長でしてよ！」

「自然体と言って欲（ほ）しいね。それより、もうちょっといるだろ、出てきてない奴（やつ）」

「記述者が忘れていると出ないらしいよ」

「初歩的なメタ台詞（せりふ）だな……いいのか？」

「でも、隅々（すみずみ）まで調べたらラバーズとか、あの羽虫とか出てくるよ？」

「それは……勘弁（かんべん）だな」

「ラーメン食べてた人、呼ぶかい？」

「いらんと言っている！」

「男性キャラクター差別はいかんよ」

「学園長！」
「とはいえ、ワシ以外、ほぼ記述者とイコールなキャラじゃから、ほぼおらん」
「じゃあ、魔王崇拝のブラックメタルバンドの人とか。名前あったよね？」
「あれも救われるんだ……」
「ともかく、霊魂はみんな救われるんだとさ」
「ふぅん。じゃあ、もういい！　みんなでてこーい！」
　絢子が叫んだ。
　総ての霊魂が集まってきた。
　怒り、悲しみ、恨み、ねたみ、それらを放出し、現世に置いていく。
　宇宙全体が縮小していく。
　阿九斗を中心に空間が折りたたまれ、閉じる。
「私も連れて行ってくれるのですか？」
　阿九斗の中に吸収されていく途中のころねが聞いた。
「ゼロがそうだったように、人格は固着して自我になる。君にも自我があるさ」
　阿九斗が微笑んだ。
　その阿九斗も、急速にその肉体を縮小していく。
　けーなの中に取り込まれていく。

やがて、けーなも裏返り、その新天地に——反宇宙に——消えていく。

後に残るのは、虚無の中の虚無。言葉すらない虚無。すなわち、新たな虚空宇宙が誕生したのだ。

が、時間は少し巻き戻る。

刹那の刹那、ほんの一瞬。時間として記述できる最小単位の時間に、その会話は行われることになった。

虚空宇宙に残される存在がひとつ。

たったひとつだけあった。

「俺は……俺は残されるのか?」

勇者の声。

ヒロシでもあり、望一郎でもあり、賢人でもあり、記述者でもある者の声。

「そうです。すでに告げたとおり、あなたは残されます」

自同律は答える。救済の神と見えたが、それは冷酷な神でもある。

「どうして!」

叫ぶ。悲痛に。半ば予測してもいた。だが、自分にも救済はあると期待していた。

それが裏切られた。

「あなたは物語を物語として残さなければならない。次の魂があの場所に行けるように」

その宣告を信じがたいと首を振る。

「そんな残酷なことって……！」

「残酷さという認識。それも物語を通じて感じること。あなたは、また最初からはじめるだけです。あなたは次の瞬間には虚空宇宙にあり、次に無貌宇宙へ、そして重力宇宙へとシフトすることになります。何万年かかろうとも」

「やめてくれ！　また物語をやり直すのか？」

「それは仕方の無いことなのです。あなたはあなただから」

「俺が俺だから？　逃れられないじゃないか！」

「それを自同律というのです」

「俺が自同律に？」

「あなたが次の自同律です。次にあなたが救われるとしたら、自同律として人々を、新たな人格たちを導いた時のみです。重力に囚われた物語を軽さへと導く、その時」

「そんな悲しいことって……皆と別れて……」

「悲しみすら、この一瞬後ではもう古い、通用しない物語。別れるのではありません。あなた以外にも、このいちばんうしろの大魔王の物語では救われない魂があったはず。だから、あなたが次の自同律となれば、孤独ではないのです」

　この会話は時間の最小単位においてなされたが、勇者が次に自らの意識を持った虚空宇宙には、時間の観念はなかった。

勇者は、永遠に考え続けた。
たわごとをたわごととして。
正気であることを証明するために誰を証人にすべきかを。
とはいえ答えは同じ。
いつも言葉を発するだけ。
「誰か？」
と探し。
「出会えた！」
と叫ぶ。
物語を生まずにはいられない。
最良の救済を意図して最悪に向かって。
それでも——
繰り返せば——
どこか遠く——
かすかに垣間見えるはずの——
そこにあるはずの幻影であってほしくない何か——
そこに——

たどり着いて――

何をするのだっけ?

「まだ先があるってことを知るのさ」

わかった。

また、はじめよう。



# あとがき

長らくお待たせしてしまいました。水城正太郎（みずきしょうたろう）です。お買い上げありがとうございます。最後までお付き合いありがとうございました。本当に感謝です。これが初見の方も、手段問わず全巻揃（そろ）えていただけると幸いです。さすがに最終巻のみで楽しめるかというと微妙ですが、アニメから入っていただいた方は六巻からお揃えいただければ、と思います。

作家視点からすると、一シリーズで一年から三年かかることは覚悟しているものですが、それも定期刊行できればのこと。約六年の期間がかかってしまいました。読者の皆様（みなさま）、特に学生の方からすると、長い時間だったかと思います。中学生が大学受験、という程度（ていど）の経過（けいか）ですか。自分の過去を振り返ると、あの頃（ころ）は一年が長かった気がします。

自分で言うのも問題ではありますが、「連載（れんさい）ものとして先を余り考えず行けるところまで行く」を方針とした本シリーズ、最後には難解（なんかい）な内容となってしまいました。その点、六年が経過したことはプラスに働いたかと思います。当時内容がわからなかった方も、いろいろな本を読書後に再読いただければ、「あー、このあたりの理屈が本なんだ」とわかっていただける部分もあるかと思います。

さて、ぶっつりと切られることが多いライトノベル業界、こうして内容的に完結できたことは作家として幸福なことだと思います。さらにドラマＣＤ化、イラストご本人によるコミック化、アニメ化、とメディアミ

ックスを果たしたことはよい経験となりました。関係の皆様に感謝申し上げます。

　近況というか、執筆少し前の状況は、本書をお読みくだされば、大体記述通りであることを保証いたします。もちろん、少し違う部分もありますが、こういう体験をしたような気がしますよ。

　それでも作家を続ける覚悟でありますので、今後、水城の名を見たら、少しでも気にとめていただけることを願いつつ、しばしのお別れです。

二〇一四年四月　水城正太郎

◆ご意見、ご感想をお寄せください……ファンレターのあて先◆

〒151−0053
東京都渋谷区代々木2−15−8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
水城正太郎先生／伊藤宗一先生

# PROFILE

## 水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『A－TEAM』主催。
健康のためにバット型ダンベルを買いました。なにより素敵なのが「俺みたいな馬鹿は棒状のものを振り回す癖がある」ため、いつでもトレーニングしてしまうことです。元気出していきますぜ。

## 伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
＜一言＞
こんなに長く一つの作品に携われたことを幸せに思っています。
本当に勉強させていただきました、水城先生、HJ文庫編集部の皆様、感謝しております。
漫画版の最終巻も宜しくお願いします！

HJ文庫

# いちばんうしろの大魔王 ACT13

2014年4月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8